

匝瑳市小高遺跡

—特別支援学校整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成28年2月

千葉県教育委員会

そう さ し お だか い せき
匝 瑞 市 小 高 遺 跡

— 特別支援学校整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地(遺跡)として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの業務内容に加え、平成25年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第9集となる、特別支援学校整備事業に伴って実施した匝瑳市小高遺跡の発掘調査報告書です。小高遺跡からは、縄文時代早期の土器が多数出土し、この地域の歴史を知るうえで貴重な成果を加えることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料だけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係者や関係諸機関の皆様には、心から感謝申し上げます。

平成28年2月

千葉県教育委員会

文化財課長 永沼 律朗

凡　例

- 1 本書は、千葉県教育庁教育振興部財務施設課による特別支援学校整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。
小高遺跡 匝瑳市飯高1692(遺跡コード 235-001)
- 3 千葉県教育庁教育振興部財務施設課の依頼を受け、千葉県教育庁教育振興部文化財課が発掘調査及び報告書作成に至る整理作業を平成26・27年度に実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は以下のとおりである。

○平成26年度【発掘調査】

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 永沼律朗

発掘調査班長 蜂屋孝之

担当者 主任上席文化財主事 土屋潤一郎

実施期間 平成26年6月2日～平成26年9月12日

○平成27年度【整理作業・報告書刊行】

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 永沼律朗

発掘調査班長 蜂屋孝之

担当者 主任上席文化財主事 田井知二

実施期間 平成27年5月1日～平成27年8月31日

- 5 本書の執筆は第1章及び第2章第2節、第3章2を田井知二が、第2章第1節3を主任上席文化財主事 田島新が、第2章第1節1・2、第3章1を文化財主事 牧武尊が行った。編集については牧が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、匝瑳市教育委員会、千葉県立八日市場特別支援学校、千葉県教育庁財務施設課ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図の座標数値は、世界測地系にもとづく平面直角座標(第IX座標系)で、図面の方位はすべて座標北である。
- 8 本書で元図として使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行「八日市場」電子地形図25,000(縮尺:1/25,000)
第4図 匝瑳市発行「K F 95-2」匝瑳市年計画基本図(縮尺:1/2,500)平成23年
- 9 図版1の航空写真は、京葉測量株式会社が昭和55年2月12日に撮影した80-C17B-18(原版:約1/12,500)を使用した。
- 10 繩文土器のうち纖維を胎土に混入しているものについては、挿図の土器断面にドットで示した。

本文目次

第1章はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 調査の方法と概要.....	1
第2節 遺跡の位置と環境.....	3
1 遺跡の位置と地形.....	3
2 周辺の遺跡.....	5
3 小高遺跡の調査履歴.....	7
第3節 基本層序.....	7
第2章 調査の成果.....	9
第1節 旧石器時代及び縄文時代.....	9
第2節 奈良・平安時代以降.....	24
1 遺構.....	24
2 出土遺物.....	27
第3章 総括.....	29

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 小高遺跡と周辺の遺跡.....	2	第9図 縄文土器(4).....	16
第2図 グリッド模式図.....	4	第10図 縄文土器(5).....	17
第3図 トレンチ・グリッド配置図.....	4	第11図 縄文土器(6).....	19
第4図 調査地点と周辺の地形.....	6	第12図 縄文土器(7)・土製品.....	20
第5図 基本層序.....	8	第13図 遺構外出土石器(1).....	21
第6図 縄文土器(1).....	11	第14図 遺構外出土石器(2).....	23
第7図 縄文土器(2).....	13	第15図 001・003・009.....	25
第8図 縄文土器(3).....	15	第16図 道路状遺構周辺出土遺物.....	27

表 目 次

第1表 石器属性表 22 第2表 道路状遺構周辺出土遺物観察表 28

図版目次

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 図版 1 小高遺跡周辺航空写真（約 1/10,000） | 図版 4 縄文土器（1） |
| 図版 2 調査前状況（東側） | 図版 5 縄文土器（2） |
| 土層堆積状況（3C-00南壁） | 図版 6 縄文土器（3） |
| 遺物包含層検出状況 | 図版 7 縄文土器（4） |
| 縄文時代遺物出土状況（3 トレンチ） | 図版 8 縄文土器（5） |
| 縄文時代遺物出土状況（6 トレンチ） | 図版 9 縄文土器（6） |
| 縄文時代遺物出土状況（3B-08） | 図版10 縄文土器（7）・土製品・遺構外出土石器（1） |
| 001・002・006・007（南端部分） | |
| 002・006（南端部分） | 図版11 遺構外出土石器（2）・道路状遺構周辺出土遺物 |
| 図版 3 002・003・006（2C-23 付近） | |
| 003（西侧部分） | |
| 003（東端部分） | |
| 003（西端部分） | |
| 009 | |
| 009 遺物出土状況 | |
| 009 遺物出土状況（2C-73 付近） | |
| 009 調査風景 | |

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

近年、全国的に特別支援教育への理解が浸透してきたのと併せて、特別支援学校の専門的な取り組みの成果に対する評価や期待が高まる傾向にある。このような背景から千葉県においても特別支援学校の児童生徒数が増加し、教室不足や施設の狭隘化が切実な問題となっている。千葉県教育委員会では、平成23年3月に「県立特別支援学校整備計画」を策定し、特別支援学校の整備を進めることとした。具体的には平成27年度までの5年間に、今後使用しなくなる小中学校の校舎や余裕教室を活用し、新設校や分校等の設置を目指している。

この整備計画に基づき匝瑳市の旧飯高等学校を改修し、特別支援学校飯高分校(計画開始時の仮称。正式名称は平成26年12月に「千葉県立飯高特別支援学校」と決定。)を設置する計画が立てられた。計画実施にあたり、平成25年9月6日付で千葉県教育委員会財務施設課から事業予定地内における「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会文化財課へ提出された。文化財課では現地踏査等の検討に加えて現地での試掘を実施した。これらの結果を踏まえ、平成25年9月12日付で事業予定地内に1か所の遺跡が所在する旨の回答をおこなった。これを受け関係諸機関が遺跡の取扱いについて協議を重ねた結果、計画の変更は困難であることから記録保存の措置を講ずることとし、千葉県教育委員会文化財課が発掘調査を実施することとなった。

2 調査の方法と概要

発掘区の設定（第2図）

発掘区は世界測地系(第IX座標系)の公共座標に基づいて設定した。X座標-27,520mとY座標62,400mの交点を基準に調査対象範囲を覆うように40m×40mの大グリッドを作り、西から東へA、B、C、北から南へ1、2、3の記号を付けた。大グリッドはこれらの記号を組み合わせ1 A、2 B、3 Cのように呼称した。大グリッドの中は4m×4mの小グリッド100個に分割し北西から南東に向かって00、01、02、……97、98、99の番号を付け、大グリッドとの組み合わせで1A-00、2B-55、3C-99などと呼称した。

調査の面積と期間（第3図）

小高遺跡の発掘調査は事業予定地のうち、舗装工事を行う通路、解体され新たに建設される屋内運動場と電気室・エレベーター施設、合わせて2,481m²を対象としておこなった。

発掘調査の期間は、平成26年6月2日から同年9月12日までであった。調査対象2,481m²に対し、上層確認調査248m²、下層確認調査48m²を実施した。その結果、上層で遺構及び遺物が検出された範囲1,000m²についての本調査を実施した。下層の立川ローム層の確認調査では遺構・遺物を検出しなかつたため、本調査を実施することなく終了した。



第1図 小高道跡と周辺の遺跡 ($S=1/25,000$)

調査の手順

発掘調査は縄文時代以降を対象とした上層の確認調査から開始した。調査区の形状が複雑で狭小な部分もあることから、幅2mを基本としたトレンチを任意の長さで設定し、表土を重機で除去した後、遺構と遺物の検出をおこなった。トレンチの設定は南北方向もしくは東西方向を基本としたが、植栽や建物基礎等を考慮して現地の状況に合わせて設定した。

縄文時代以降の遺構や遺物の検出がなかった調査範囲の西側は、引き続き旧石器時代を対象とした下層の確認調査を実施した。下層確認調査は上層確認調査で設定したトレンチを利用して2m×2mのグリッドを設定し、人力と重機を併用しながら関東ローム層を掘り下げて遺構と遺物の発見に努めた。

東側の調査区では遺物包含層と道路状遺構、溝状遺構を検出したことから、調査対象範囲の南東側1,000m²で上層本調査を実施することとなった。本調査は調査範囲の表土を重機で除去し、順次包含層と遺構の検出、精査、記録作成、写真撮影、遺物取上げ等の作業をおこなった。記録作成のうち、実測図面は基本的に平板を使って全体図・トレンチ配置図・遺構平面図を作成し、遺構断面図・土層断面図についても作成した。写真撮影はフィルムカメラ(6×7モノクロ、35mmカラーリバーサル)を基本にデジタルカメラ(Raw・JPEGデータ)を併用した。上層本調査終了後、西側と同様の方法で下層の確認調査を実施した。

整理作業は平成27年5月から文化財課四街道分室で開始し、8月末までにすべての作業を終え、この度報告書刊行に至った。また、報告書編集中に報告書に基づいた収納整理作業も併せて実施した。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地形（第4図、図版1）

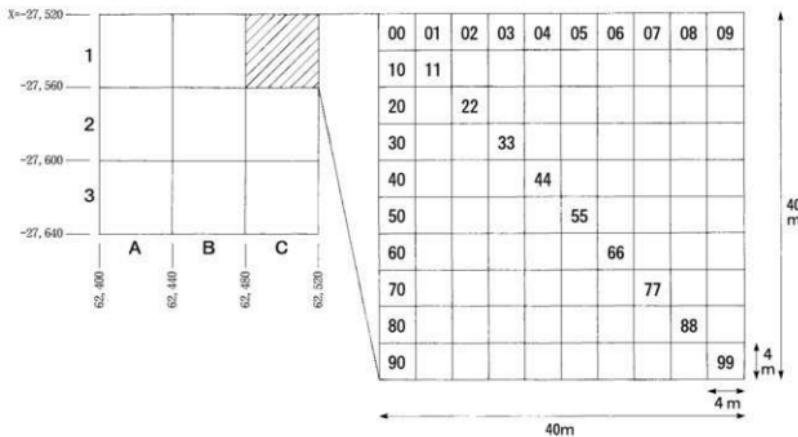
小高遺跡は、千葉県匝瑳市の北西端に位置し、安久山、飯高、小高、内山の各地区にまたがる東西約1.3km、南北約1.0kmを範囲とする広大な遺跡である。今回、調査対象となった遺跡の北側部分は東西300m、南北400mほどの三角形に近い平坦面で標高は38m～40m程度である。遺跡の北側は、栗山川から東に延びる支流からさらに分かれた支流の最奥部によって開析され、台地平坦面と谷底面には約20mの比高がある。遺跡の南西側及び南側は、栗山川支流の借当川から北へ延びるいくつかの支流によって開析され、谷部底面の標高は15m～18mを測る。平坦面東側は幅50m弱の細い尾根を経て小高遺跡の中央から東側部分へと続いている。北西側も同様の細い尾根を経て隣接する前原遺跡が位置する台地平坦面へと続いている。

遺跡の所在する匝瑳市は、平成18(2006)年に誕生した新しい市で、旧八日市場市と旧匝瑳郡野栄町が合併して成立した。千葉県全体からみると県の北東部に位置し、千葉市へ約45km、鎌子市大吠崎へは約30kmの距離にある。

匝瑳市は地形的にみると、北から北西側の台地部分と南から南西にかけて展開する低地部分に大別される。台地部分はいわゆる下総台地の東端南側で、低地部分は九十九里浜平野の一部にあたる。台地と低地を分ける急崖は古い海蝕崖である。

匝瑳市周辺の台地は他の地域に比べて河谷による浸食が著しく、谷頭が複雑に奥深くまで入り組んでいる。したがって台地上の平坦面が少なく、谷に下る斜面は急傾斜となるところが多い。

低地の大部分をしめる海岸平野は、九十九里の海岸線に平行して並ぶ砂堆列と砂堆間の低地列で構成される。この海岸平野は台地縁辺から現在の海岸線までの距離が7km～11kmほどあり、全体では総延長60kmにおよぶ長大なものである。平野の北東には寛文11(1671)年に干拓が行われ、潟湖から耕地へと



第2図 グリッド模式図



第3図 トレンチ・グリッド配置図

変わった旧椿海が隣接する。椿海は標高50m前後の旧海蝕崖によって北及び東西の三方向を囲まれ、南は九十九里低地の砂州によってふさがれたラグーンで周囲は約40km、水深は2m～4m前後であったと思われる。小高遺跡から最も近い海岸平野までは南南東へ約5km。急崖を下ってさらに7kmほど進めば太平洋を臨むことが出来る。また、東側に展開する旧椿海までは直線距離にしてわずか4km足らずである。

2 周辺の遺跡（第1図）

平成10（1993）年に刊行された『千葉県埋蔵文化財分布地図（2）—香取・海上・匝瑳・山武地区（改定版）』には匝瑳市域全体で306か所（旧八日市場市域291か所、旧野栄町域15か所）の遺跡が記載されている。しかし実際に発掘調査が行われた遺跡は少なく、各時代の周辺状況が明らかになっているとは言いがたい。ここでは遺跡の分布を中心に各時代の状況をみていくことにする。（特に記載のない遺跡は匝瑳市所在、遺跡名の後の（ ）番号は第1図に対応する）

周辺で旧石器時代の石器が出土した遺跡は数少ない。現時点では小高遺跡のほかに、飯土井台遺跡（多古町）、安久山遺跡（5）、鈴歌遺跡、小山遺跡（27）、丸山遺跡で遺物の出土が知られるが、みな資料数が少なく詳しい状況はわからない。今後、関東ローム層の発掘調査例が多くなれば旧石器時代の情報も増えていくと考えられる。

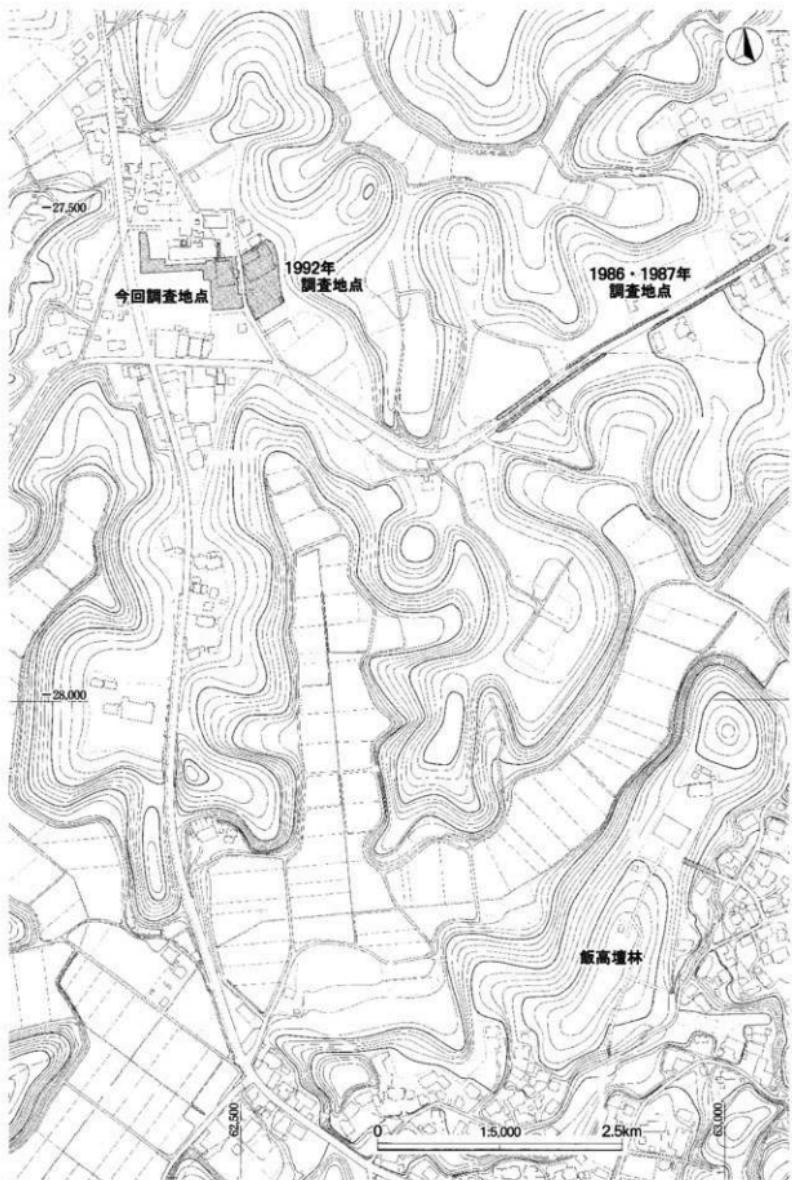
縄文時代になると遺跡の数も調査例も飛躍的に増大する。周辺でよく知られている縄文遺跡には、早期の竪穴住居跡や土坑を多数発見した旭市の桜井平遺跡、晚期後葉絃山式の標識遺跡である山武郡横芝光町の山武絃山貝塚、縄文時代後晩期の木製品が多数発見された多古田低湿地遺跡などがある。また、小高遺跡の南方を東から西へ流れる借当川と、その本流である栗山川は数多くの丸木舟が出土する河川として古くから著名である。

小高遺跡周辺に目を移してみると、今回の最も大きな調査成果である縄文時代早期の遺物が出土した近隣の遺跡は内野遺跡（1）、坂遺跡（2）（以上多古町）、柿木遺跡、石田遺跡、土仏Ⅱ遺跡（3）（以上旧山田町）、安久山遺跡（5）、大堀遺跡（11）、台遺跡（16）、大寺遺跡（7）、吉田遺跡（25）、小下原遺跡、柳台遺跡（21）、雉子ノ台遺跡（22）、小山遺跡、鈴歌遺跡で、このうち沈線文系の田戸式土器の出土が報告されているのは坂遺跡、柿木遺跡、石田遺跡、台遺跡（16）、大寺遺跡、吉田遺跡、柳台遺跡、雉子ノ台遺跡、小山遺跡、鈴歌遺跡の10遺跡である。もう少し広い範囲で早期の遺跡分布を見ると、栗山川の源流に近い現香取市（旧栗源町、旧山田町）の遺跡数が多く、下流に南下するに従って数的には少なくなる傾向が見てとれるが、水系や流域による大きな差は確認できない。

縄文時代前期になると周辺台地上に飯高貝塚（14）、片子貝塚（15）、宿井戸貝塚、八辺貝塚（28）等の貝塚が形成されるようになり、以後は継続的に集落や貝塚が展開されていくようである。小高遺跡の北西側に隣接する前原遺跡（8）も縄文土器が出土したとの記載があるが、詳細は不明である。

弥生時代から古墳時代は、旧椿海周辺と栗山川の河口を中心とした地区に多くの集落遺跡が展開する。おそらくはこの地域が九十九里沿岸で水運上利用しやすい条件を備えていたからであろう。さらに古墳時代の後半になると栗山川流域を中心に多くの古墳や横穴が造られるようになる。

奈良時代・平安時代も記載される遺跡は多数あるが、調査例は多くない。ただ、鈴歌遺跡、柳台遺跡（21）、雉子ノ台遺跡（22）、小山遺跡等の調査成果をみると、これらの遺跡周辺が旧匝瑳郡域の拠点的性格を持っていたものと考えられる。



第4図 調査地点と周辺の地形

中世以降この地域は、城郭が著しく発達した地域で、栗山川下流域、借当川流域にも数多くの城郭や砦が造られた。小高遺跡周辺には、後に寄進されて飯高檀林へ移行する飯高城跡(12)をはじめとして方田遺跡(4)(旧山田町)、金原砦跡(10)、新砦跡(17)、飯高砦跡(19)、ぬまかけ城跡(6)、内山城跡(20)、内山中城跡(18)、内山砦跡(9)、大寺城跡(13)、長岡砦跡(24)、大浦城跡(23)、宮和田城跡(26)などが残されている。また、南東約5kmには旧千田庄の中心に築城され、南北朝の動乱期に千葉氏内紛の舞台として度々登場する大島城、志摩城、並木城もあり、栗山川と借当川の流域だけで40を超える城郭跡が確認されている。

小高遺跡の南側に隣接する飯高檀林は、関東で初めて開かれた日蓮宗の根本檀林(法華宗学徒の教育機関)で、全国14か所の檀林の最高学府として位置づけられ、最盛時には1,700人もの学僧が学んでいたとされる。天正元(1573)年、同じ匝瑳市飯塚の光福寺に談所(学室)が開かれたのが檀林の前身といわれ、その後、談所は天正7(1579)年に飯高的妙福寺に移され、これが檀林の発祥となった。翌天正8(1580)年には現在の場所に移動し整備拡充が進められた。江戸時代になると、家康を始めとする徳川氏の庇護を受けて発展、格式の高い檀林へと発展し、明治5(1872)年の学制発布により廃校するまで290年余り続いた。現在は講堂、鐘楼、鼓楼、総門が国指定の重要文化財に、檀林跡(現飯高寺境内)と経蔵、題目堂、庫裡は県の史跡に指定され整備公開されている。

3 小高遺跡の調査履歴

過去に3度の発掘調査がおこなわれている。今回の調査地点を含めて、いずれの調査も遺跡の北西側に片寄っている。今回の発掘調査は、第4次調査にあたる。

第1次は主要地方道多古坂本線の拡幅工事に伴う調査で、昭和61年の4月～5月に(財)千葉県文化財センターによって1,060m²の発掘がおこなわれた。遺跡の中央北寄り部分で中世以降の溝3条や土坑2基が発見されたが遺構の広がりは散漫で、上層・下層とも確認調査の範囲内で終了している。

第2次も主要地方道多古坂本線の拡幅工事に伴う調査で、(財)千葉県文化財センターが昭和62年4月～6月に2,140m²の発掘調査を実施した。第1次の調査区の西側に隣接する場所で、第1次と合わせ東西方向に500m余りの長いトレンチを入れたような形になった。縄文時代の土坑5基、平安時代の堅穴住居跡8軒、中世以降の溝5条や塹2基等に加え旧石器時代の遺物も検出した。

第3次は八日市場市(現匝瑳市)立飯高保育所の建設に伴う調査で、平成4年5月～6月にかけて(財)東総文化財センターが事業地内の本体建設部分776m²について発掘調査をおこなった。調査地点は今回の調査区の南東側隣接地にあたる。焼土跡1基、土坑4基、溝2条、道路跡1条の遺構を検出しているが、各遺構の時期については遺構内の遺物が少なく判然としない部分が多い。出土遺物には縄文土器、土師器、須恵器、石器、鉄器等があり、縄文時代早期の土器が質・量とも群を抜いている。

第3節 基本層序(第5図)

今回の調査対象範囲は長く小学校の校庭として利用されていたためか、全体的に転圧されて土が締まった状態のところが多かった。ここでは2C-90グリッドに設定した下層確認グリッド東壁の断面図を今回の標準的な土層として記述する。

I層 表土層である。学校敷地内であることから、グラウンド造成のため客土が堆積している。部分的な擾乱も多いが、旧表土と客土を合わせて30cm～50cmの比較的厚い層厚である。昭和61年・62年の隣接地

の調査でも同程度の堆積がみられることから、客土がなくても周辺では厚い表土層の堆積がある。

II層 表土層の下からローム層までの暗褐色系の土をII層とした。

これらは色調の違いなどから、さらに2つないし3つの層に分けることができた(上からIIa層、IIb層、IIc層と呼称)。遺存状態が良好な地点では、IIa層とIIb層の各層で10cm程度の厚みを持つことが確認できたが、場所によっては両者の識別が困難なところや、2層合わせても5cmほどしか残っていない地点もあった。IIc層はIIb層と分層が比較的容易で、多くのところで20cm~30cmの厚さがあった。縄文時代早期の遺物が含まれている。

III層 立川ローム層最上層の軟質ロームで、層厚は10cm~30cm程度である。

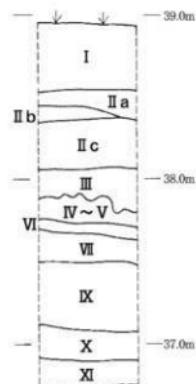
IV~V層 層厚は薄く5cm~15cm程度しか残っていない。上部は軟質化してIII層に取り込まれている。層厚が薄いこともあるが、色調等も似かよっていて分層することは出来なかった。この層以下は硬質ローム層となる。

VI層 層厚は5cm~10cmで、いわゆるAT(姶良丹沢火山灰)を集中的に含む。

VII層 第2黒色帶上部に相当する。層厚は15cm~20cm程度で、上半にはATが拡散している。

IX層 第2黒色帶下部に相当する。層厚は30cm~40cmで、今回の調査地点では分層できなかった。

X層 立川ローム層最下層で、層厚は15cm~25cmである。



第5図 基本層序 (S=1/30)

参考文献

八日市場市 1982『八日市場市史』上巻

角川書店 1984『角川日本地名大辞典 12 千葉県』

千葉県 1985『土地分類基本調査 八日市場』

八日市場市 1987『八日市場市史』下巻

千葉県土木部・財団法人千葉県文化財センター 1991『八日市場市小高遺跡』 千葉県文化財センター調査報告書第194集

財団法人東総文化財センター 1993『小高遺跡』(財)東総文化財センター発掘調査報告書第2集

財団法人千葉県文化財センター 1993『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)・香取・海上・匝瑳・山武地区(改定版)』千葉県文化財センター調査報告書第345集

第2章 調査の成果

第1節 旧石器時代及び縄文時代

旧石器時代の確認調査では、遺物集中地点などは検出されなかったものの、本調査が実施された縄文時代の遺物包含層から尖頭器など旧石器時代の遺物が数点だが出土している。縄文時代の遺物は、Ⅱc層を主体に多量に出土している。本調査の結果、縄文時代早期中葉の土器が主体であることが判明した。土器のほかには土製品や石器が少量出土している。

縄文土器の時期は、早期前葉から後期後葉にわたっている。その主体は、縄文時代早期中葉の田戸上層式が最も多く、同時期とみられる無文の土器を含め全体の6割以上を占めている。土製品は手捏土器、土器片円盤、土器片錐などが出土している。

1 縄文土器

出土した縄文土器を以下のように分類する。

- 第I群土器 撫糸文土器
- 第II群土器 田戸下層式土器
- 第III群土器 田戸上層式土器
- 第IV群土器 鶴ガ島台式土器
- 第V群土器 中期の土器
- 第VI群土器 後期の土器

第I群土器 撫糸文土器（第6図1、図版4）

1点のみだが撫糸文土器が出土している。1は縦位の撫糸文が施文されている。胎土に白色砂を含む。井草式ないしは夏島式であろう。

第II群土器 田戸下層式土器（第6図2～40・64～70、図版4）

Ⅲ群とした田戸上層式に次いで出土量が多かった。太沈線文または細沈線文で構成される文様からなるほか、フネガイ科の貝殻による貝殻腹線文が施されるものがある。焼成はよく、褐色から黄褐色を呈するものが多い。細沈線を有するものには暗褐色を呈するものもみられる。器面は内外面ともに丁寧なナデ調整がおこなわれているものが多い。胎土に植物纖維が認められるものは少なく、入っていたとしてもわずかに見られる程度である。

A類 太沈線により文様が施されるもの（2～7・10～21）

施文された太沈線文は、削り出されたような沈線であり、文様は斜行、横位、弧状の沈線で構成されている。2～7は横位や斜位の太沈線により文様が描かれている。2・3は同一個体であろう。外削ぎ状の口唇部である。10・11は弧状の太沈線を有し、10は竹管状工具による横位の押引刺突文が施されている。11は沈線間に貝殻背圧痕文が充填されている。16・17は同一個体で、沈線は太いが浅い。17は内面に太い沈線が認められる。20は尖底部である。端部まで施文されている。21は沈線が認められないが、天狗の鼻

状に延びる尖底であることから本類に含めた。

B類 細沈線により文様が施されるもの (8・9・22・23・25~39)

半截の竹管ないしは細い棒状工具により横位や斜行する数条の沈線が施されている。8・9は間隔のある細沈線間に、8は先の丸い棒状工具により、9はヘラ状工具により列点文が施されている。8は口唇部の波頂部から左右異方向の細沈線が施されている。22・23は沈線間に竹管による円形刺突文が施されている。26は先の丸い棒状工具による複列の連続刺突文で施されている。27には焼成後の貫通しない回転穿孔痕がある。

C類 フネガイ科の貝による貝殻腹縁文が施されるもの (24・40・64~70)

細沈線文による文様が施され、貝殻腹縁文が余白に充填されている。密に腹縁文が施されるものもある。24は沈線間に横位の貝殻腹縁文をまばらに施している。40は波状口縁である。口唇部は面取りされ、外面には横位の貝殻腹縁文が施されている。64は肥厚した外削ぎ状の口唇部で斜行する沈線が施され、沈線間に貝殻腹縁文が充填されている。

第三群土器 田戸上層式土器 (第6~11図41~63・71~373、図版4~9)

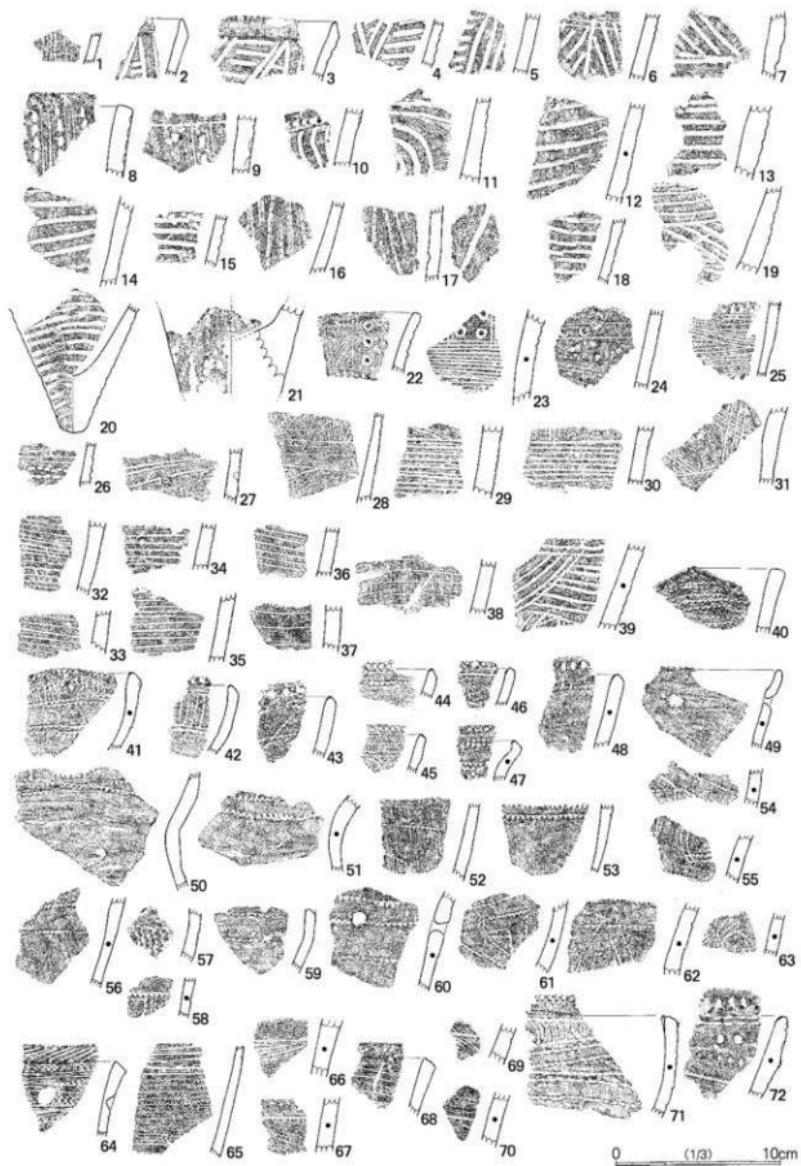
今回の調査で最も多く出土した土器群である。口縁部及び胴部に貝殻腹縁文や沈線などにより文様を描出するものと、口唇部にキザミを施す程度で胴部が無文となるものの2種に大別することができ、このほかに無文の土器などがある。

口縁部及び胴部に貝殻腹縁文や沈線、刺突文などによって入組文や鋸歯文、蕨手文などを描出するものは、内外面の調整は丁寧で、総じて小型の深鉢が多い。胎土に植物纖維を含むものが多い。全体の器形を復元できる個体はなかったが、器形は胴部上半で外側にゆるやかに屈曲し、口縁は内湾ぎみに開くものが多い。胴部下半とみられる有文の破片がほとんどないことから、胴部下半が無文となるものが多いのである。

口唇部にキザミを施す程度で胴部が無文となるものは、量的には多いようだが、有文のものでも胴部下半が無文となることから、量的な割合を推測することは難しい。紙数の都合で、無文の土器片の掲載を大幅に省略しており、本群の土器量の主体は、圧倒的に無文の土器片である。総じて胎土に植物纖維が認められ、目立って多く認められるものもある。焼成は全体的に良好であり、褐色を呈するものが多い。

A類 フネガイ科の貝殻を使用して文様を描出するもの(第6・7図41~63・71・73~117、図版4・5)

41~63は、貝殻の腹縁を使用し並行または斜行する文様を描出している。41・42は腹縁文を密に充填している。71・73~117は貝殻文に加えて、沈線や押引刺突文などを施している。41は緩やかな波状口縁であり、波頂部下に貝殻の腹縁で押し分けた突起を有する。43・54・55・61~63は貝殻の腹縁文によって入組文が構成されている。49・60は焼成前に穿孔が施されている。71・73・76~78・84・86・87は隆帯を挟むように押引文が施されている。73・78は口唇部内面に貝殻の腹縁によるキザミを有し、78の波頂部は貝殻の腹縁で押し分けで深いキザミとしている。81・83・88は隆帯を挟むように貝殻腹縁文が施されている。85は貝殻腹縁文を縦列に施し、先端が鋭い工具によって横位の押引文が施されている。89~91は隆帯を貼り付けた後に貝殻の腹縁でキザミを施している。92は61~63と同様に貝殻腹縁文による入組文が構成されており、その間に棒状工具による刺突が施されている。93は輪積み痕が認められる。95・96は横位の押引刺突文下に、浅い貝殻腹縁文が縦列状に配されている。97は半截竹管状の工具による刺突文を有する。98・99は突起を有し、その周囲に貝殻腹縁文を施している。98は突起を貝殻の腹縁によって押し分けてお



第6図 繩文土器（1）

り、99は棒状工具によって刺突されている。なお99は胎土に植物纖維を含んでいる。101・102は波状沈線を有し、三角状の区画内に貝殻の腹縁を押圧している。107～109は沈線による区画内に貝殻腹縁文を充填しており、107・108は斜位、109は羽状に施されている。110～113は沈線文と細かい貝殻腹縁文を有する。117は貝殻背圧痕文が施されている。

B類 隆帯を有するもの（第6・7図72・118～137、図版4・5）

118～137はキザミが施された微隆帯を有する土器である。本類は外面にナデ調整、内面にケズリ調整がなされているものが多く、129～131は胎土に植物纖維を顕著に含む。焼成は全体的に良好である。118は文様構成が隆帯と押引文からなり、78に類似しているが、隆帯にキザミがある点が異なる。119・120・122～133は隆帯と沈線文が施されており、一部には隆帯を沈線で挟むような施文がおこなわれているものがある。121は細かいキザミが隆帯および口唇部に施されている。132の隆帯の頂部は貝殻の腹縁によって押し分けられている。133は弧状の隆帯とそれに沿った細沈線を有する。134～135は弧状のヘラ状工具によって押引文が施されている。137はやや太い隆帯を貼り付けた後に浅いキザミを施している。

C類 突起を有するもの（第7・8図138～160、図版5・6）

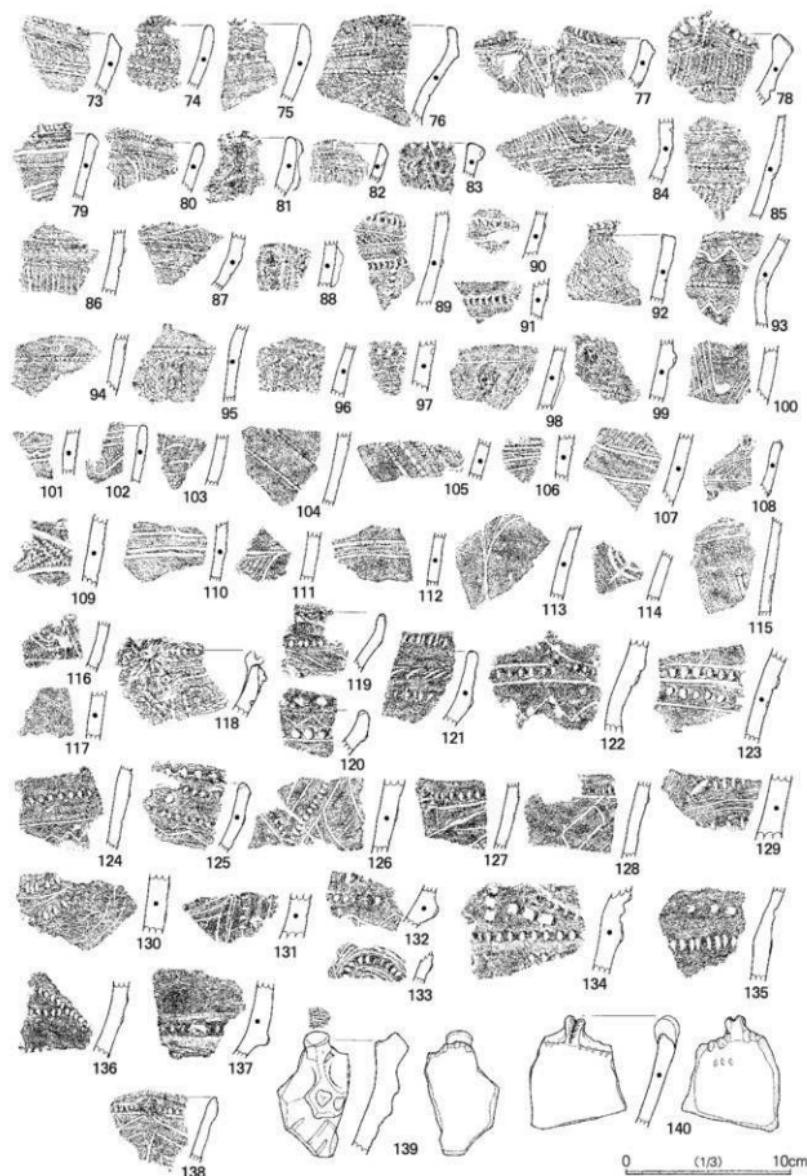
本類は内外面ともにナデ調整されているものが多く、145・160は胎土に植物纖維を顕著に含む。焼成は全体的に良好であり、褐色から褐色を呈するものが多い。139・148・150・157・158を除いた土器の突起はすべて貝殻の腹縁によって押し分けられている。159・160は突起端部である。139は波状口縁であり、波頂部に円筒状の突起を付している。突起には貝殻背圧痕文が施されている。142は体部および口唇部の内面に貝殻の腹縁による押引文が施されている。144は波状口縁であり、波頂部の突起と口縁部の突起を貝殻腹縁文によってつないでいる。148は波状口縁であり、波頂部下に突起を付している。突起は棒状の工具により刺突されている。149は突起が縦に並ぶように配しており、口唇部の内面は貝殻の腹縁によってキザミが施されている。151は他のC類と異なり、突起が貝殻の腹縁によって横に大きく押し分けられている。153は突起を付し、そこから下部へ向かって逆V字状に隆帯を延ばしている。隆帯にはキザミが施されている。154はやや粗く突起が付されており、端部は押圧されて凹んでいる。155は2条のキザミが施された隆帯があり、一方は貝殻の腹縁で縦に押し分けられた突起を有する。下部には斜位の条痕を有し、内面には縦位の擦痕がみられる。158は半球状の突起が付され、そこから横位に貝殻腹縁文が施されている。

D類 押引文を有するもの（第8図161～180、図版6）

161～180は先端の鋭い棒状工具による刺突文を有する土器である。本類は内面にミガキ調整されているものが多く、177は胎土に植物纖維を顕著に含む。また胎土に砂粒を含むものが多い。焼成は全体的にやや良好であるが、166は不良である。161・162は押引文と沈線文による文様が描かれている。168は押引文と沈線文が並行して施され、内面には擦痕がみられる。172～174・177～179は明らかにベン先状工具による押引文が施されており、明神裏Ⅲ式の施文法に類似している。180は口縁部突起が欠落したものであり、複列の押引文が穿孔部分に沿って梢円形を描いている。

E類 沈線文を有するもの（第8図181～199、図版6）

181～198は棒状工具による沈線文を有する土器である。本類は内外面ともにナデ調整されているものが多く、189は胎土に植物纖維を顕著に含む。焼成は全体的に良好であり、ほとんどが褐色を呈する。181～183・190～192はヘラ状工具による押引文を有する。181・185は口唇部に棒状工具の側面を押圧した太いキザミが施されている。184は口唇部にヘラ状工具によるキザミが施されている。190の下半部はヘラ状工



第7図 繩文土器（2）

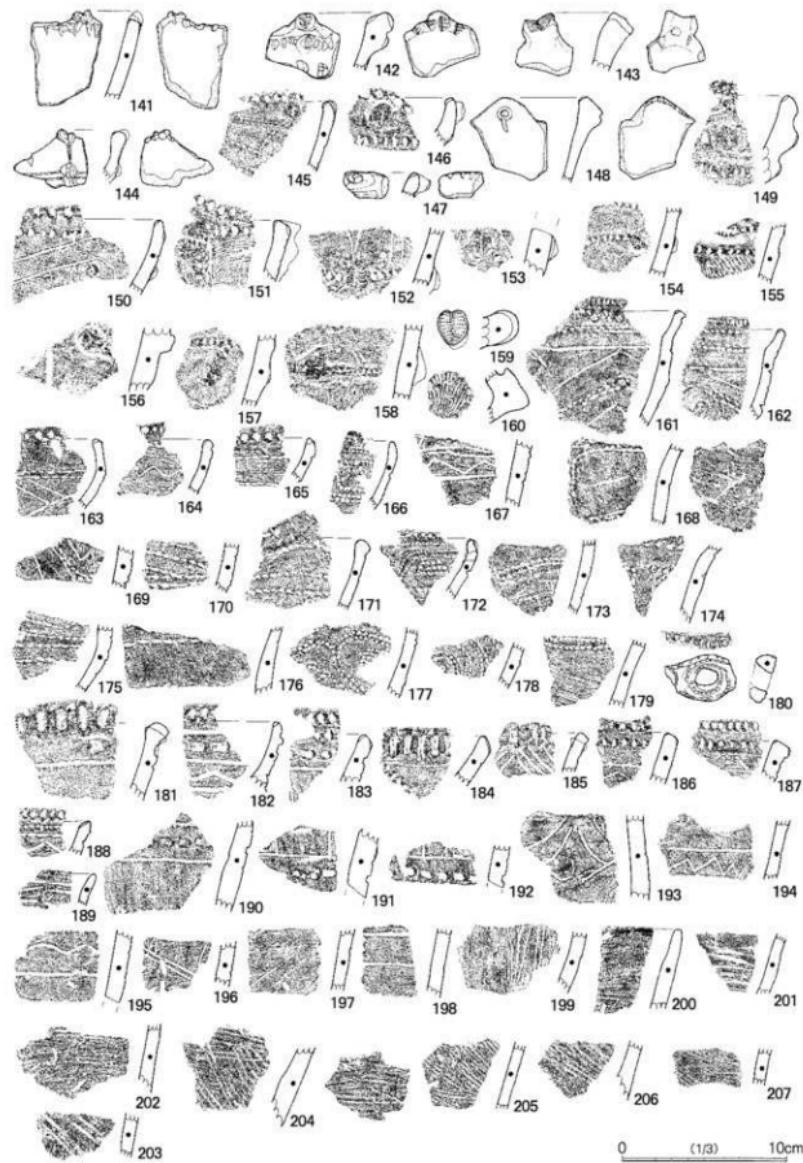
具による縦位のケズリ調整がみられる。193は沈線文と押引文によって文様を描いている。199は胴部の下半で、他と異なって縦位の沈線を粗く施している。

F類 条痕ないしは擦痕を有するもの（第8・9図200～219、図版6・7）

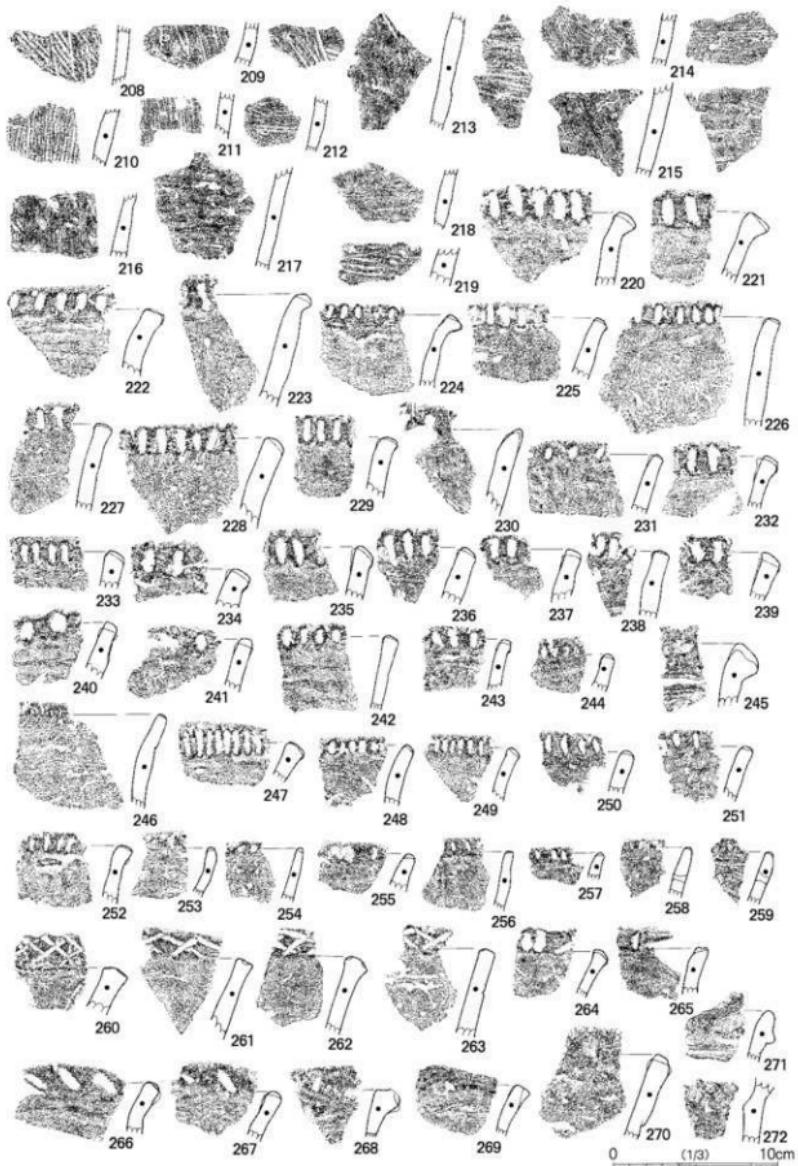
条痕を伴うものが少量出土している。貝殻によると思われるものもあるが、植物繊維による条痕も含まれている。また擦痕状の調整痕を伴うものも少量認められる。胎土に植物繊維を顯著に含むものが多くみられ、204・213～215・217が該当する。200～202は外面に横位の条痕を有し、202の内面はミガキ調整されている。204～208は外面に斜位の条痕を有する。205は外面に斜位と横位、内面に横位の条痕を有する。206～208の内面はミガキ調整されている。209～211は外面に縦位の条痕を有する。209は内面に横位と斜位の条痕を有し、211の内面は横位のナデ調整がなされている。212～219は内外面に擦痕状の調整痕を残している。

G類 口縁部にキザミを有するもの（第9・10図220～309、図版7・8）

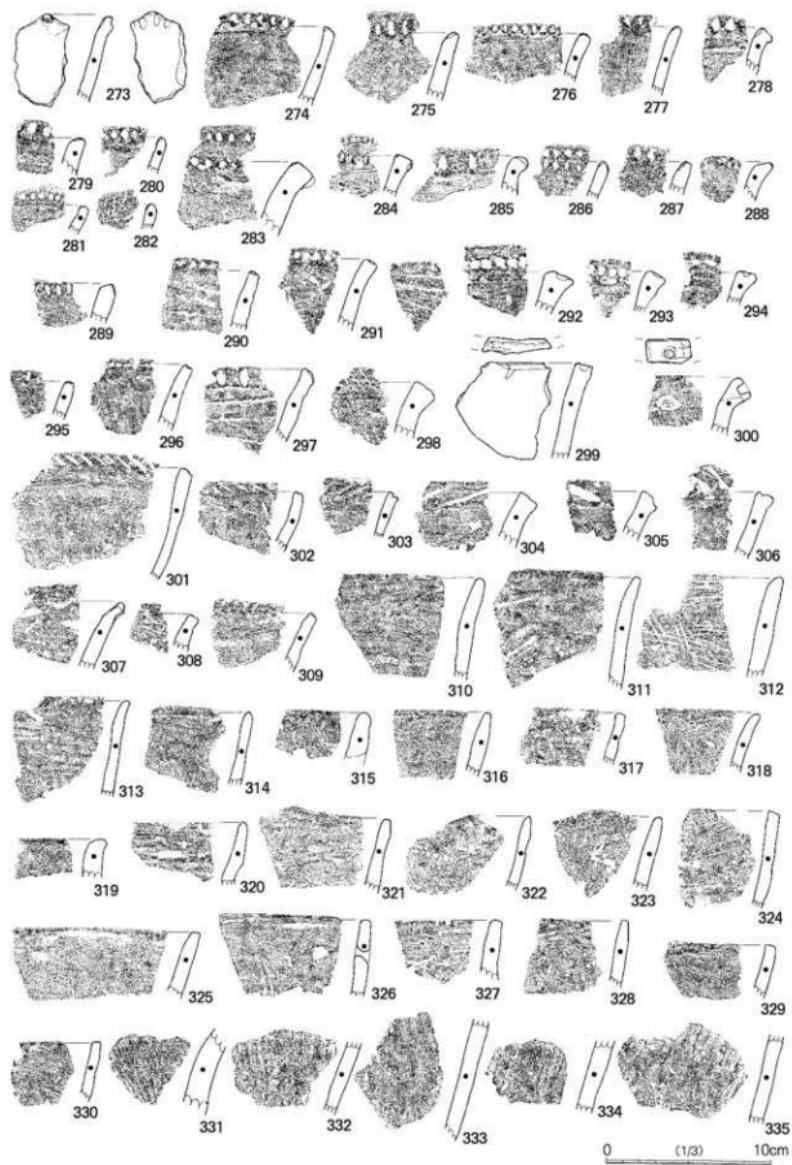
本類は田戸上層式の後半にみられる口唇部のキザミのみが施され、胴部文様を施さないものである。キザミは多様で、主に棒状工具によるものが多いが、ヘラや貝殻などの工具によるキザミもみられる。施文方法は太い棒状工具による深いキザミや浅く細かいキザミ、斜位や格子目状、口端部に押引文を施すものもある。内外面ともにナデ調整されているものが多い。胎土に植物繊維を顯著に含むものが多くみられ（220・226・227・246・252・261・262・266・267・270・272・283・299・302）、焼成は全体的に良好である。褐色を呈するものが多いが、黄褐色や暗褐色のものもみられる。220～245は太いキザミを有し、245以外は棒状工具を口唇部に直行して押圧している。240・241はキザミの幅が広く、指による施文かもしれない。241は内面に擦痕がみられる。245は口唇部に対して平行に棒状工具を押圧しており、また欠損して不鮮明であるが、口唇部に直行したキザミが施されている。外面は条痕がみられる。246～259は細かいキザミが施されている。258・259は焼成前に穿孔されている。260～263は斜格子状にキザミが施されており、断面の形状から棒状工具の側面を押圧したと考えられる。264・265は不規則な施文であり、264は口唇部に棒状工具による直行したキザミが連続し、間隔をあけて斜位のキザミが施されている。265は斜め方向から施されたキザミが口唇部に直行し、隣接して棒状工具による沈線が斜位に施されている。266～272はキザミのほか、口唇部を内外面から交互に押し込むことで緩やかな波状を呈しており、これは干潟町（現旭市）桜井平遺跡第III群9類と同様の手法である。266～268・270は棒状工具によって斜位に押圧されている。269・271・272は指による押圧がみられ、269は正面、271は斜位、272は内外面からつまむように押圧されている。273～282は口唇部内面にキザミを有する。ほとんどが先の鋭い工具によってキザミが施されている。273は波状口縁であり、波頂部に貝殻背压痕文が施されている。277・280は外面にミガキ調整がなされている。282は貝殻の腹縁によるキザミがなされている。283・284・286は内外面にキザミを有し、284のみ細かいキザミが施されている。288・289は外面にキザミを有する。288は焼成後に穿孔されており、内外面にナデ調整がなされている。290～295は口端部に押引きによる刺突文を有する。294・295は竹管による刺突であり、294は背を用い、295は半截した腹を用いている。297は棒状工具を口唇部に直行して押圧し、輪積み痕を残している。298は貝殻の腹縁によるキザミを有し、299は口端に沈線が施されている。300も299と同様な押圧が行われ、竹管による刺突後に、同じ工具により押引文が施されている。307・308は口唇部に貝殻背压痕文が施されている。



第8図 繩文土器（3）



第9図 繩文土器 (4)



第10図 繩文土器（5）

H類 無文・その他（第10・11図310～374、図版8・9）

310～329は無文の口縁部である。全くの無文の土器がどの程度存在するのかは不明だが、胎土と焼成、丸味のある口唇部の形態から田戸上層式に並行する無文土器と考えられるものである。内外面には擦痕が認められるものもあるが、丁寧なナデ等の調整が施されているものの方が多いようである。器形は緩やかに開き、若干外反するものが主体である。315は焼成前に外面から穿孔した後、内面から孔を拡張している。320は本群のなかで器形が他と異なり、口縁の下部に稜を有する。器面は黄褐色から赤褐色を呈し、内面は焼成によって一部で赤色化している。326は内外面から回転穿孔されている。330～350は無文の胴部である。無文土器片が最も出土量が多く、内外面の調整や胎土から田戸上層式を主体としていると考えられる。351～367は底部である。尖底と丸底のものがあり、丸底には平底に近いものもみられる。368～373はその他の土器であり、368・369は胎土に植物纖維を顯著に含む。368は爪による細かい刺突文が横位に施されている。369は爪による刺突文が横位、斜位に施されている。370は内面に横位の沈線があり、371は同様の沈線が外面にみられる。372は口縁部から胴部であり、板状の貼付がみられる。373は横位の凹線である。

第IV群土器 鵜ガ島台式土器（第11図374、図版9）

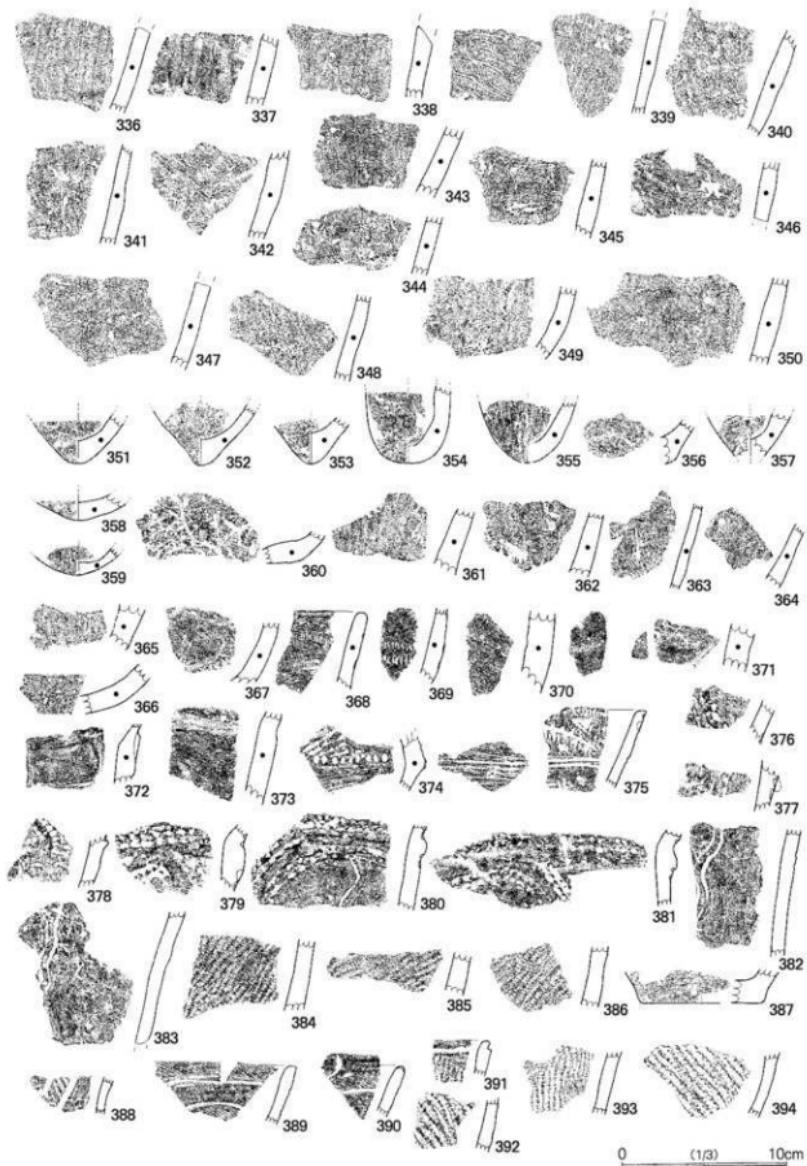
374は早期後半の鵜ガ島台式土器である。キザミが施された隆帯を有し、半截竹管による押引文が斜位に施されており、下部は貝殻条痕である。内面は貝殻条痕が施されている。

第V群土器 中期の土器（第11図375～387、図版9）

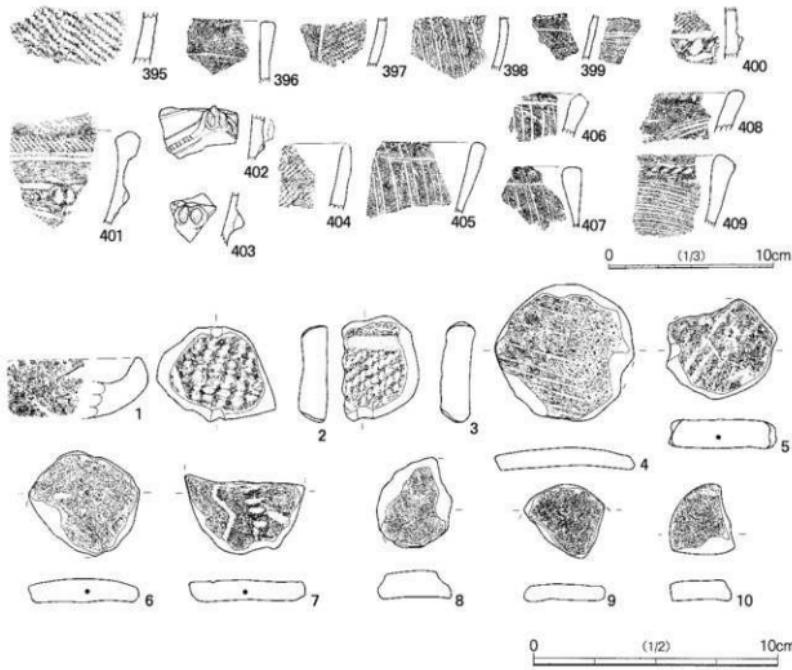
中期の土器は初頭から中葉のものが出土している。375は、形状の異なる工具による沈線とキザミによって文様が施され、三角の陰刻文が口縁部にある。器厚は薄く、直線的に開く器形である。五領ヶ台式である。376～378は角押文を有する。376・378は隆帯に沿うように施文され、胎土に砂粒を含む。377は貼付文を有する。379～383は阿玉台式土器である。胎土に砂粒や雲母を顯著に含む。焼成はやや不良なものが多い。379～381は胴部の上部であり、隆帯に沿った複列の角押文を有する阿玉台Ⅱ式土器である。382・383は胴部の下部であり、2条の波状沈線文が施されている。384～386は地文繩文である。胎土に砂粒を多く含み、硬緻である。いずれも横位のLRの細かい繩文が施され、内面はナデ調整されている。387は底部である。胎土に砂粒を多く含む。

第VI群土器 後期の土器（第11・12図388～409、図版9・10）

図示したものがそのほとんどである。388は称名寺I式である。沈線の区画内に繩文が充填されている。389～400は加曾利B2式ないしはB3式土器である。389・390は同一個体である。沈線によって区画された中に繩文が施されている。内面はいずれもミガキ調整されている。391は横位の沈線下にLRの繩文が施されている。口唇部から内面にかけてミガキ調整されている。392～395は地文繩文で、内面に丁寧なミガキ調整がなされている。392は横位のRL、393は斜位にRL、394・395は縦位のLRが施されている。396は口縁部が無文帶となっている。397・399は沈線の区画内に繩文が施されている。399は上部に列点状の刺突文がある。398は縦位の沈線文と横位2列の刺突文がある。400は横位に延びる斜位の隆起を有する。401～409は後期後葉の安行2式土器である。401～403は豚鼻状貼付文を有する。貼付文はキザミを有する隆帯上に付されている。外面の無文帶および口唇部から内面にかけてミガキ調整されている。404は縦位の繩文が施されている。405～407はまばらな弧線文が施されている。口縁部に沈線が1条遺っている。409は口唇部に紐線文、口縁部に弧線文が密に施されている。



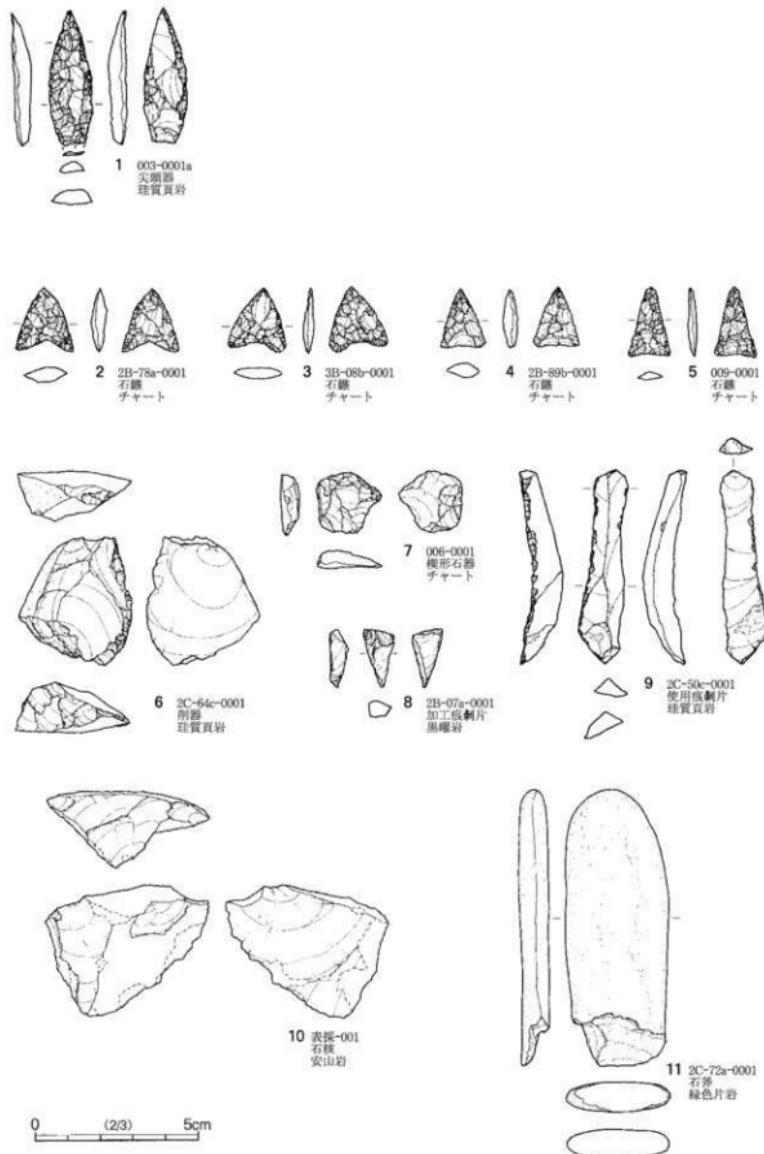
第11図 繩文土器 (6)



第12図 繩文土器(7)・土製品

2 土製品 (第12図1~10、図版10)

1は手捏土器である。内面は指によるナデ調整がなされている。胎土は砂粒が混入せず、焼成は良好で明褐色を呈している。縄文時代後期であろう。2・3は土器片錘である。中期後葉の加曾利E式の土器片を加工している。キザミを伴うことから中期の土器片錘の形態であるが、このほかに加曾利E式土器の出土はない。4~10は土器片円盤である。千葉県内の土器片円盤は一般的に後期にみられることから、いずれも後期に加工されたものと考えられる。4は安行式の粗製土器、5~7は田戸上層式の土器片を加工している。



第13図 遺構外出土石器（1）

3 石器（第13・14図、第1表、図版10・11）

1は尖頭器である。嶺岡産の石材が使用されている可能性がある。珪質頁岩の表面の右側は器体中央まで、表面右側縁及び裏面右側縁と左側縁中央に調整加工をおこなっている。基部が欠損している。旧石器時代と考えられる。

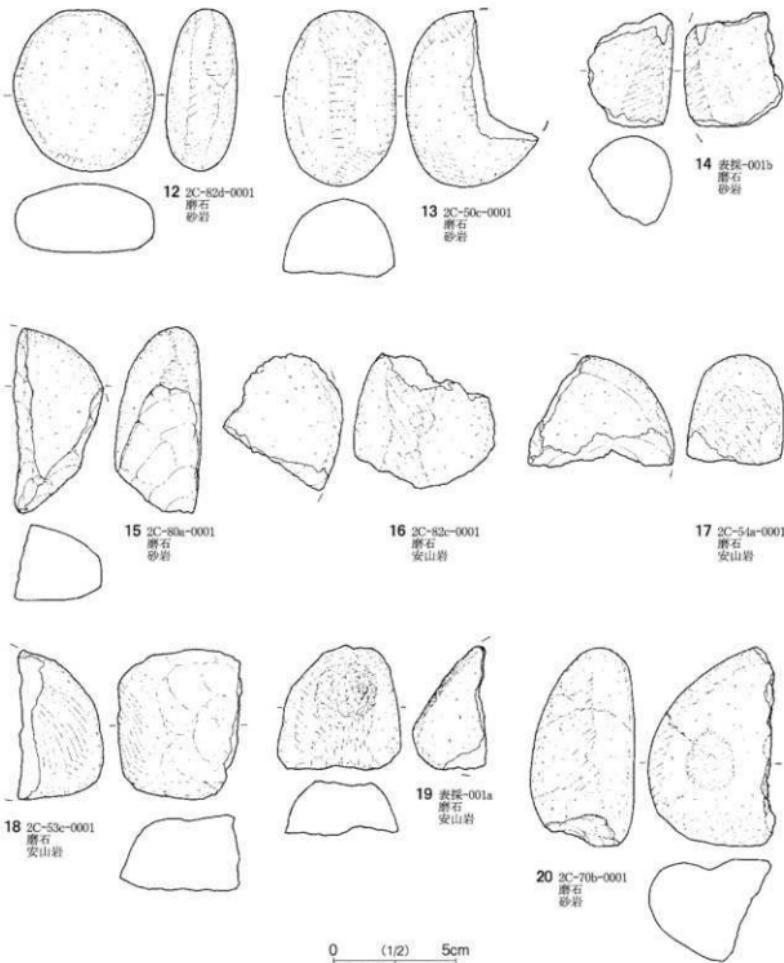
2～20は縄文時代の石器である。2～5はチャートの石鏃で、2・3は比較的浅い凹基、4・5は平基に近い。6は自然面が平滑で黄土色、剥離面が黄白色の珪質頁岩の削器である。下端部に残る剥離痕から打面再生の可能性も考えられる不定型な剥片の右側縁に連続した調整加工をおこなっている。旧石器時代の可能性がある。7はチャートの楔形石器である。上下両端および両側縁に対向する剥離痕がみられる。8は透明感のある黒曜石の加工痕剥片である。切断剥片の上部に調整加工をおこなっている。9は下部の一部が小豆色で全体が灰色の珪質頁岩の使用痕剥片である。石刀状の縦長剥片の表面左側縁および裏面右側縁に微細な剥離痕がみられる。裏面下部の剥離痕は被熱によるものかもしれない。旧石器時代の可能性がある。10は自然面が紙やすり状で黄褐色、剥離面が黄褐色、新鮮な面が黒灰色のガラス質安山岩の厚みのある不定型な剥片である。旧石器時代の可能性がある。

11は緑色片岩と考えられる石斧である。薄手で細長い礫の下端部に使用によると考えられる剥離痕がみられる。なお、刃部等の研磨及び使用による擦痕などは観察困難であったが、下部に磨耗によるものか多少光沢痕がみられる。縄文時代早期に伴うようで、成田市一鍬田甚兵衛山北遺跡（空港No.11遺跡：石材・器種は凝灰岩の磨製石斧）、同市東峰御幸畠西遺跡（空港No.61遺跡：石材・器種は凝灰岩の研磨礫）、取香和田戸遺跡（空港No.60遺跡：石材・器種は凝灰岩の小型磨製石斧）、印西市大割水溜遺跡（石材・器種は緑色凝灰岩の礫）などで出土している。

12～20は磨石である。12～15・20は砂岩、16～19は安山岩である。12～17は礫の周縁に浅い敲打痕あるいは磨耗痕、18は礫の周縁に磨耗痕、表面に浅い敲打痕、19は礫の周縁に比較的深めの敲打痕と磨耗痕、20は礫の周縁に磨耗痕、表面に窪みがみられ凹石としても使用されている。

第1表 石器属性表

插図 番号	遺物番号	器種	石 材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重 量 g	備 考
第13図1	003-0001a	尖頭器	珪質頁岩	40.1	13.2	5.7	3.2	旧石器時代
第13図2	2B-78a-0001	石鏃	チャート	19.3	17.6	4.8	1.3	
第13図3	3B-08b-0001	石鏃	チャート	17.7	19.6	3.4	0.9	
第13図4	2B-89b-0001	石鏃	チャート	17.7	14.8	4.8	0.9	
第13図5	009-0001	石鏃	チャート	21.0	13.1	2.9	0.6	
第13図6	2C-64c-0001	削器	珪質頁岩	39.7	34.5	15.2	17.7	旧石器可能性あり
第13図7	006-0001	楔形石器	チャート	19.0	20.1	16.5	2.0	
第13図8	2B-07a-0001	加工痕剥片	黒曜石	17.5	9.3	5.2	0.7	
第13図9	2C-50c-0001	使用痕剥片	珪質頁岩	58.6	14.2	13.5	4.7	石刀状剥片、旧石器可能性あり
第13図10	表採-001	石核	安山岩	40.7	49.4	23.4	34.4	黒色ガラス質、旧石器可能性あり
第13図11	2C-72a-0001	石斧	緑色片岩	84.9	31.2	9.5	45.2	
第14図12	2C-80d-0001	磨石	砂岩	65.8	57.3	29.4	156.3	
第14図13	2C-50c-0001	磨石	砂岩	71.5	53.8	45.5	174.8	
第14図14	表採-001b	磨石	砂岩	46.5	39.8	34.8	76.5	
第14図15	2C-80a-0001	磨石	砂岩	76.4	37.0	35.0	113.7	
第14図16	2C-82c-0001	磨石	安山岩	55.5	48.8	58.0	139.2	
第14図17	2C-54a-0001	磨石	安山岩	45.0	59.2	39.6	124.8	
第14図18	2C-53c-0001	磨石	安山岩	60.7	34.2	50.8	154.7	
第14図19	表採-001a	磨石	安山岩	50.1	30.4	50.1	85.7	
第14図20	2C-70b-0001	磨石	砂岩	81.1	50.5	42.5	199.7	



第14図 遺構出土石器 (2)

第2節 奈良・平安時代以降

1 遺構（第15図、図版2・3）

溝を伴う道路状の遺構が2条検出されている。このうちの1条は、平成4年に東側の隣接地で行われた財団法人東総文化財センターによる発掘調査で検出されてた道路状遺構につながるものである。003の遺構番号が付されている。もう一つは北北西—南南東方向に延びる数条の溝からなる道路状遺構である。この道路状遺構は、飯高小学校建設の際に学校予定地内を通っていたため敷地の外側に付け替えられた旧道と重なっている。002・006・007・010などの番号が付けられた数条の溝から構成されており、総称して001と呼ぶことにする。2条の道路状遺構は2Bグリッド、2Cグリッドに展開し2C-22・23グリッド付近で交差している。

001 道路状遺構

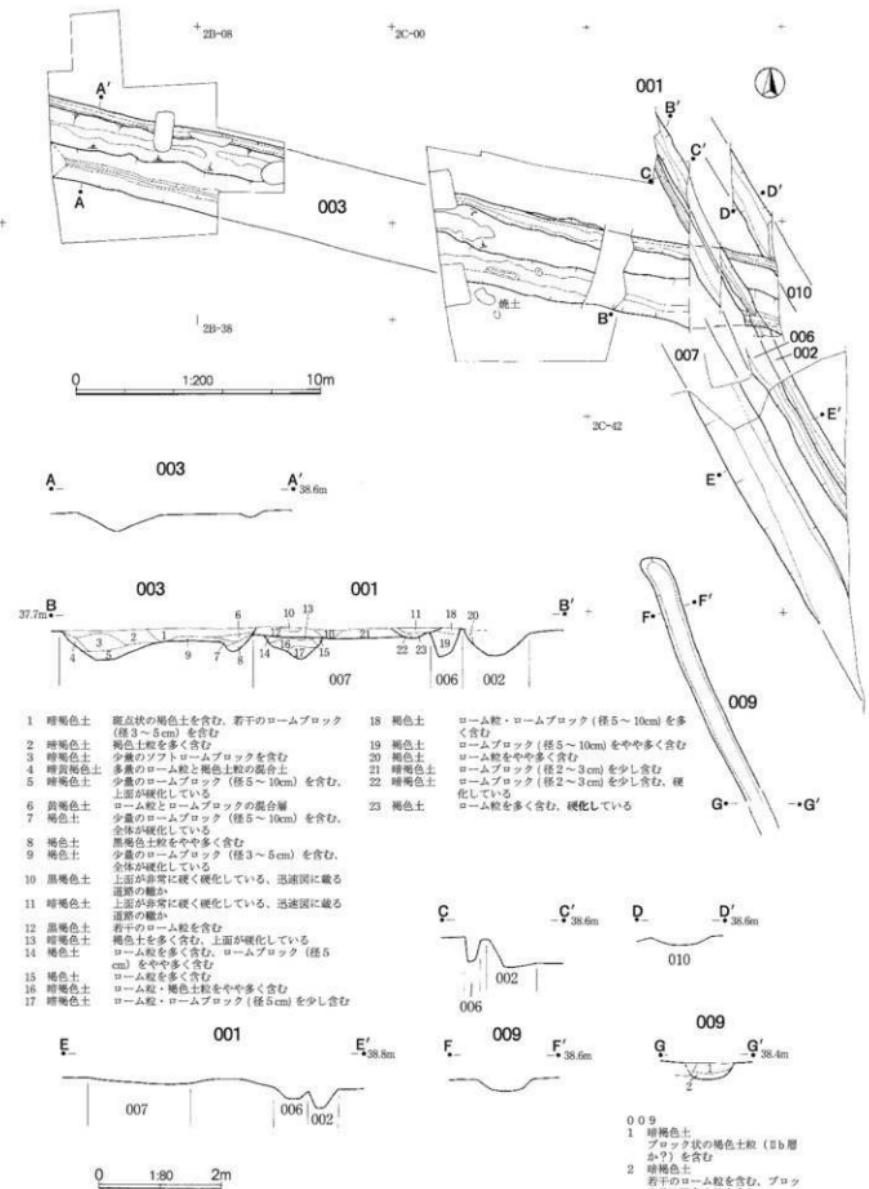
本調査範囲の東側で検出した。前述したように、学校建設前に通っていた道路の下に所在していたものである。調査の当初は旧道に関連した溝群と思われたが、土師器などの遺物が周辺から出土したことから、古い道路跡が存在していることが推測された。本調査を実施したのはおよそ30mである。検出した範囲では北北西—南南東(N-25°-W)方向に直線的に延びている。溝に挟まれた中央部が若干高い土手状となるが、周囲との比高は2cm～3cm程度とごくわずかである。土手状の部分の幅は0.8m～1.2mである。北側に延びるのは明らかだが、北に行くに従って006や007の溝により消失する。土層断面で確認した硬化面は、断片的ながら遺構確認面に1枚(B-B' 10層～12層上面)と遺構底面に1枚(B-B' 13層上面)の計2枚あり、継続的な使用が想定される。また、土層断面から見た新旧関係は、001が003に壊されていることから、003よりも古いと考えられる。003のように左右に溝を伴う道路と見られ、複数の溝が検出されていることから、何度かの道路改修が行われていると考えられる。ただ、擾乱もあり溝の切り合い関係がはっきりしないことから、その経緯を明らかにすることは難しい。

遺物は、溝を伴うと判断されるような出土状況のものはなかったが、溝の検出時に表層から遺物が出土している。最も古い遺物は、奈良・平安時代の土師器であるが、中世・近世の遺物も出土していることから、長期にわたり使用され学校建設前まで使われてきた道路であろうと推測される。周辺には奈良・平安時代の堅穴住居跡などの遺構が発見されていないことから、出土した土師器などが何らかの関連を伴う可能性が強いと考えられる。各溝について以下に記す。

002 本調査範囲の東側(2C-12・23・34・44)で約16mが検出されている。遺構の西側は並行して走る006と重複しており、北端の土層断面からは新旧関係は不明である。溝は北北西—南南東(N-25°-W)方向に直線的に延び、確認面での幅0.5m～0.6m、深さ0.2m～0.4m、底面は幅0.1m～0.3mではほぼ平坦、壁面は西側の立ち上がりが急で東側はやや膨らみを有して立ち上がっている。遺物は若干の土師器等を検出している。

006 調査範囲の東側(2C-12・23・34・44)で17m程度を検出した。遺構の東側は並行して走る002と重複しており、北端の土層断面の観察では新旧関係ははっきりしない。溝は北北西—南南東(N-25°-W)方向に直線的に延び、確認面での幅0.5m～0.6m、深さ0.2m～0.6mを測る。底面は幅0.2mほどで平坦、壁面はほぼ直線的に立ち上がっている。若干の遺物が出土している。

007 調査範囲の東側(2C-33・43・44・53・54・64)で11m程度を検出した。溝状遺構の名称を付したが「溝」というよりは「くぼみ」に近い印象を受ける。遺構の東側は003と接しているが重複関係がある



第15図 001・003・009

かどうかは確認できなかった。遺構は北北西—南南東(N-25° -W)方向に直線的に延び、確認面での幅は2.0m前後、深さは5cm~15cmとごく浅い。遺構底面は不明瞭で幅は0.7m~0.9m程度、南側にいくほど浅くなる。壁面はゆるやかに立ち上がっている。遺物は土師器や須恵器が覆土中から出土している。

0 1 0 本調査範囲の北東端(2C-13・23)に位置する溝である。検出したのは4mほどで、北北西—南南東(N-30° -W)方向にはほぼ直線的に延びている。南端は003と重複しているが搅乱が多く、003との時間的な先後関係は明らかに出来なかった。確認面は北側が高く南側とは0.1mほどの差がある。溝の幅は1.0m~1.1m、深さ0.2mほど、底面はほぼ平坦で壁面はなだらかに立ち上がる。遺物は検出できず遺構の時期は特定できない。

0 0 3 道路状遺構

2Bグリッド、2Cグリッドを東西に横断するように走る遺構で、本調査範囲で約30mを検出した。遺構は南北二本の溝と溝間の平坦面で構成される。遺構の展開は直線的で西—東(N-80° -W)方向に延びている。ただ、この遺構がこのまま西に延伸すると1Aグリッド南縁のどこかに再び出現するはずだが、確認調査の結果、その延長線上のトレンチ内には同一の遺構が確認できなかつたことから、本遺構は直線的には延びておらず、北側ないしは南側にカーブし、いずれかの方向に延びているものと推測される。確認面での幅は2.6m~3.1mを測るが、東から3m付近で急に幅が狭くなっている。各々の形状は西側の方が整然としていて東側は崩れている。確認面は全体的に西側が下がっている。

遺物は土師器の細片が出土しているが、遺構の時期は確定するには至っていない。南溝の遺構外南側(2C-20・21)で焼土を2か所(0.8m×0.4m、0.3m×0.2m)検出しているが、本遺構に関連するかどうかはわからない。001とした道路状遺構と切り合い関係にあり、001を切っているものの、001が現代まで継続しているとすれば、本遺構がある程度限られた期間しか使用されなかつた道路であった可能性が高い。

北溝 検出面での幅は0.3m~0.7m程度、溝の深さは0.3m~0.7mを測る。底面は西側がやや下がる傾向があり、幅は0.3m~0.8m程度である。

南溝 検出面での幅は1.4m~2.0mと北側の溝に比べて著しく広い。溝の深さは0.3m程度、底面はあまり明瞭でなく幅は0.1m~0.5m程度で、凹凸はあるが大きな傾斜は無い。壁面はやや膨らみを有してだらだらと立ち上がる。溝がある程度埋まった時点で硬化面の形成がみられる(SEC A-A' 5層上面)。

路面 左右の溝の検出面から0.1m~0.2mほど低い位置に硬化面が形成されている。幅(北溝と南溝の間)は1.0m~1.9mを測る。中央から西側の部分に幅0.2m~0.5mのごく浅いくぼみ(深さ2cm~3cm)が東西にのびている。東側の土層断面をみると、遺構底面に1枚と底面から5cmほど上(SEC A-A' 7層・9層上面)に1枚の計2枚の硬化面が観察できた。

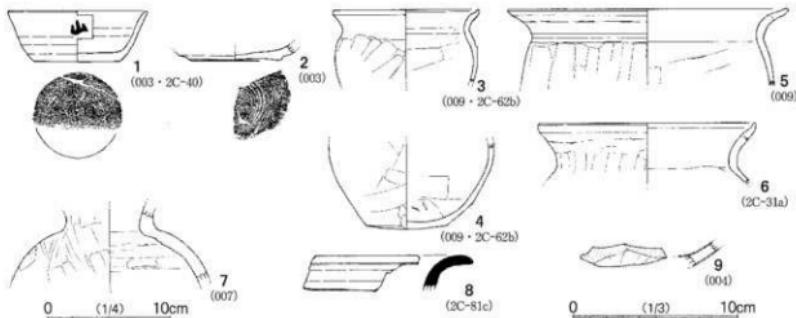
0 0 9 道路状遺構

調査範囲の東側(2C-52・62・63・73)で約11m検出した。接したり重複したりする遺構はないが、001・002・006・007・010の各遺構と展開する方向は同一である(北北西—南南東(N-20° -W))。確認面での幅0.8m~1.0m、深さは15cm~20cmと浅い。底面は幅0.4m~0.6mを測るがあまり明瞭でなく、やや膨らみを有して、だらだらと立ち上がる。出土した遺物の多くは底面から10cm程度浮いた状態で検出しており、細片が多いことから、遺構が廃棄された後に遺物の混入した土が客土として堆積した可能性が高いと思われる。

2 出土遺物 (第16図、図版11)

遺構周囲の調査及び溝の覆土内から出土した遺物は、土師器・須恵器・陶磁器・銭貨・鉄滓などである。土器類は土師器の小片がほとんどで、器壁の薄い壺の破片が目立つ。灰色の色調の須恵器は10点、褐色系の須恵器は16点のみでいずれも小破片である。古墳時代と確実に判断できる個体はなく、奈良・平安時代の所産と考えられる。実測可能な遺存の良好な遺物は少なく時期の特定は困難だが、土師器は8世紀後半を主体とする時期が想定され、001道路状遺構の時期の上限を示している可能性がある。陶磁器はほとんどが近世のものであるが、1点のみ中世の青磁片が出土している。

1・2はロクロ整形の土師器坏である。1はいわゆる箱形坏で、外面の体部上位に小さく「山」の墨書きが確認できる。底面は静止糸切り後、周囲を回転ヘラケズリ調整される。2は底部破片で底面は回転糸切り痕が明瞭にみられる。胎土は精緻である。3～6は土師器壺である。3・4は小型壺で、胎土・調整が近似するため同一個体の可能性がある。5・6は口縁部破片である。口縁端部をつまみ上げるように整形され、体部は縦方向のヘラケズリ調整が施される。7は土師器の壺の肩部破片である。遺存が少なく復元実測だが、本来はもう少し頸部径が大きい可能性もある。内外面ともヘラミガキ調整が施され、器壁が厚い。他の土師器破片に比べ異質で、古墳時代の所産の可能性もある。8は須恵器壺の口縁部破片と考えられる。単口縁で大きく外反し、口径は30cm程度と推定できる。胎土は緻密で、わずかに白色砂粒が含まれる。9は青磁の碗または鉢の体部下位の小破片である。外面に鎬の連弁文が施される。胎土は緻密で、白みを帯びる。13世紀～14世紀の龍泉窯系と考えられる。10～14は写真図版と表のみの掲載である。10は銭貨破片だが、銹化が著しく銭種などは不明である。11～14は鉄滓である。14は小型の楕円形滓、11～13は流出滓と考えられる。



第16図 道路状遺構周辺出土遺物

第2表 道路状遺構周辺出土遺物観察表

() 推定 () 現存長

No	遺構	種類	器種	法量(cm)	重存度	胎土	成形形	備考
第16回1 0 0 3 2C-40	土師器	环	口径	(11.4)	約1/2	黒色無砂粒 多	内面 口唇 ヨコナデ 体部 横方向のナデ	环部外面に正位で「山」の描書
			底径	(7.0)			外面 口唇 ヨコナデ 体部 横方向のナデ 体部下端 回転(?) ヘラケズリ	
			器高	4.1			底外面 静止系切り後周縁回転ヘラケズリ	
第16回2 0 0 3	土師器	环	口径	-	図示部分約1/3	微砂粒	内面 一	
			底径	(7.6)			外面 一	
			器高	(1.3)			底外面 回転余切り無剥離	
第16回3 0 0 9 2C-62b	土師器	甕	口径	(12.0)	図示部分1/4以下	細砂粒多	内面 口唇部 ヨコナデ 口縁部～頸部 横方向のナデ 胴部 ヘラナデ	薄手だが全体的に難な成形 口縁部がみ 4と同一個体の可能性あり
			頸径	(10.4)			外面 口唇部 ヨコナデ 口縁部～頸部 横方向のナデ 胴部 ヘラケズリ	
			器高	(6.0)			底外面 一	
第16回4 0 0 9 2C-62b	土師器	甕	口径	(14.5)	図示部分1/3以下	無砂粒・赤 色スコリア を含むが密	内面 ヘラナデ	全体に難な成形 3と同一個体の可能性あり
			底径	(6.5)			外面 ヘラケズリ	
			器高	(7.0)			底外面 丸みを有し不安定 不定方向のヘラケズリ	
第16回5 0 0 9	土師器	甕	口径	(23.0)	図示部分1/4以下	小砂粒多	内面 口唇部 ヨコナデ 口縁部～頸部 横方向のナデ 胴部 ヘラナデ	薄手だが全体的に難な成形 口縁部がみ 口縁部外に輪積み痕あり
			頸径	(19.0)			外面 口唇部 ヨコナデ 口縁部～頸部 横方向のナデ 胴部 ヘラケズリ	
			器高	(6.2)			底外面 一	
第16回6 2C-31a	土師器	甕	口径	(17.8)	図示部分1/3以下	砂粒を含む が粗	内面 口唇部 ヨコナデ 口縁部～頸部 横方向のナデ 胴部 ヘラナデ	口縁部に輪積み痕あり
			頸径	(14.8)			外面 口唇部 ヨコナデ 口縁部～頸部 上半 横方向のナデ 頸部下半～胴部 縦方向のヘラケズリ	
			器高	(5.0)			底外面 一	
第16回7 0 0 7	土師器	甕?	口径	-	図示部分1/4以下	細砂粒多	内面 口唇部 ヨコナデ 口縁部～頸部 横方向のナデ 胴部 ヘラナデ	内面：表面荒れ 厚くボテっとした作り
			頸径	(7.1)			外面 ヘラケズリに近いナデ後荒い ミガキ	
			器高	(6.4)			底外面 一	
第16回8 2C-81c	須恵器	甕?	口径	-	小破片	白色砂粒	横方向のナデ	全体に難な成形 口径は14cm~15cm程度か
			底径	-			外面 横方向のナデ	
			器高	-			底外面 一	
第16回9 0 0 4	青磁	甕?	口径	-	小破片	極めて細選	内面 横方向のナデ	船載品 外面上に鉛垂弁文
			底径	-			外面 一	
			器高	-			底外面 一	
図版11 10	2C-74	鍍金	銅鋤	外径 (23.4) 郭内径 (6.8) 緑厚 (0.1)				鍍化が著しく外線、内郭不鮮明 文字も不鮮明で鍍種不明 計測値の単位はmm
図版11 11	0 0 3	鍍津	流出?	長径 (2.2) 短径 (1.5) 重さ (3.8)				
図版11 12	0 0 3	鍍津	流出?	長径 (2.1) 短径 (1.5) 重さ (2.6)				
図版11 13	0 0 9	鍍津	流出?	長径 (3.3) 短径 (1.8) 重さ (5.0)				
図版11 14	0 0 9	鍍津	椀形	長径 (5.0) 厚さ (2.0) 重さ (42.1)	約1/2			小型の椀形津

第3章 総括

1 縄文時代の遺物について

発掘調査の結果、遺物包含層から早期から後期までの遺物が出土した。出土遺物のうち早期の土器が最も多く出土しており、撚糸文、田戸下層式、田戸上層式、鶴ガ島台式などの各型式が出土している。中期は五領ヶ台式、阿玉台II式などが出土している。後期は、称名寺I式、加曾利B式、安行2式などが出土している。早期の土器では、田戸上層式が主体を占めており、有文の土器片に比べ無文の土器片が圧倒的に多かった。無文の土器は、胎土に纖維を微量混入するものが目立つ。器面の調整は総じて丁寧で、擦痕状の調整痕を表裏に伴うものは少なく、貝殻条痕ないしは条痕を伴うものは更に少なく微量といった方がよい。田戸上層式の文様を伴う有文の土器には、フネガイ科の貝による1条ないし間隔をあけた並行する2条の腹縁文のほか、単純な入組文を構成するものがあり、さらに腹縁文の充填が顕著となるもの、キザミや刺突列を伴い隆帯と沈線とから文様が構成されるものも含まれている。いずれも量的には少ない。一方、口唇部にのみ文様が施され、胴部は無文となる土器が今回の調査では最も多く出土しているとみられる。口唇部の施文には、棒状工具による太いキザミや角頭状の口唇部に列点状のキザミを施すもの、異方向からのキザミにより格子状の文様となるもの、口端に押引きの刺突文を施すもの、内面と外面からの交互の押圧による前後の波状縁となるものなどがあり、旭市(旧干潟町)桜井平遺跡の同時期の土器群の中にいくつかの類例を見いだすことができる。口唇部にのみ文様が施される土器群は、次の子母口式にも継続するとみられ、田戸上層式後半に限られるものであるとは簡単には言えないようである。今回の調査で出土した土器には、子母口式が皆無であることから、田戸上層式、とりわけその後半期の様相を示すとみられる点で重要であるといえよう。

2 奈良・平安時代以降の道路状遺構について

今回調査した道路状遺構が001と003の2つからなることは遺構の項で述べた。検出状況を整理すると、003は1992(平成4)年に財団法人東總文化財センターによる調査で検出した道路状遺構の東側延長部分にあたる。1992年の調査分を含め東西方向に延びている。もう一方の001は今回初めて検出されたもので、両遺構とも時期を決定できる遺物がなく、時期は不明である。しかし、道路幅が4mを超え、溝を左右に伴うことから、主要な幹線としての機能を伴っていた可能性が高い。路面には複数の硬化面が確認され、溝の掘り替えもおこなわれていることから計画性があり継続的に使用されていたことが窺える。

ここで遺構に関連する周囲の状況を見ておこう。003は2度の調査以外に手掛かりはなく、両端がどこに向かうかは不明だが、このまま直進したとすると東は50m足らずで、西も150mで台地の縁に到達してしまう。一方、001の延伸方向には現在も使われている道路がある。この道路は、現在この地区の主要な道路である多古笠本線と佐原八日市場線をつなぐ300mの短い道路に過ぎないが、小高と飯高の字を分ける境界上を通る道であり、今回の調査でその周囲から出土した遺物によって、奈良・平安時代から存在していた可能性もあるとみられる。

やはり気になるのは、本遺跡の南側にある飯高塙林の存在である。今回検出した道路との関連性があるのだろうか。周辺遺跡の項でも述べたが、飯高塙林は最盛期の江戸時代後半には千人を超える学徒がいた

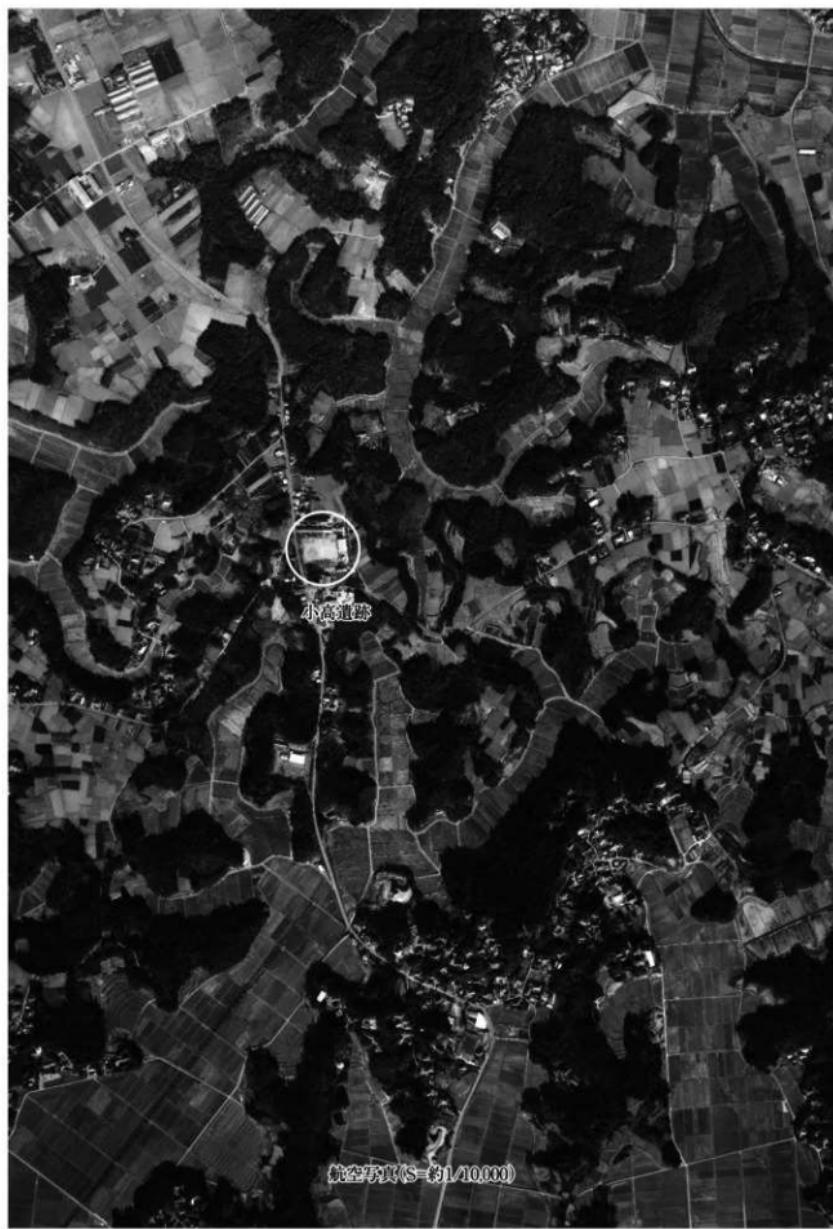
という。壇林はこの地区の中心的な施設であり、当然周囲には多くの関連施設があったと考えられる。たとえば、学徒が生活する「衆寮」もそのひとつで、1803(享和3)年には200を超える衆寮があったとされる。飯高壇林では台地上に建てられた講堂より低い谷部に衆寮が造られていたことが知られており、記録には「中台」「城下」「松和田」の名が見える。台地上の平坦面が少ないとこの地区的地理的特徴も含め、台地と低地との間には幾筋もの道が存在し往来は盛んだったと想像される。

また、飯高壇林とともに関東三大壇林の一つに数えられる中村壇林があった多古町南中は飯高の北西方向にあり、小高遺跡はこの中村壇林と飯高壇林を結ぶルート上に位置している。1695(元禄8)年、水戸徳川家二代目当主の水戸光國が江戸城から水戸へ帰る途中、下総の諸寺を巡ったという記録が残されており、この中に中村壇林から金原、安久山を通って飯高壇林に参詣したとの記述もある。このような記録を掘り所とすれば、今回検出した道路状遺構は、少なくとも江戸期には飯高壇林と関連施設を結ぶ道路として機能していた蓋然性が高いと考えられ、今回の調査によってさらに時代を遡ることができる可能性がでてきたといえるだろう。

参考文献

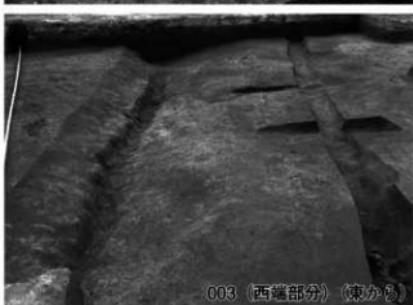
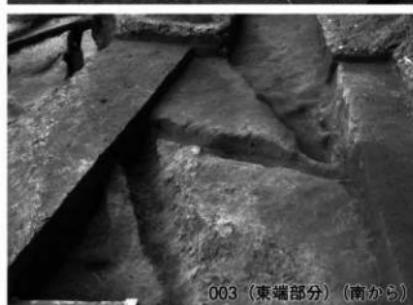
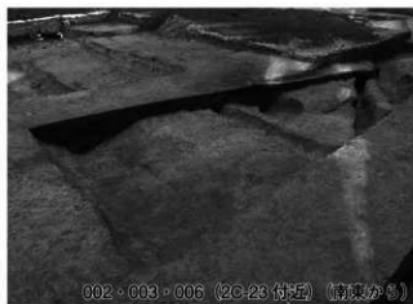
- 八日市場市 1982『八日市場市史』上巻
- 財団法人千葉県文化財センター 1984『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV－香山新田中横振遺跡(空港No.7遺跡)－』千葉県文化財センター調査報告第72集
- 八日市場市 1987『八日市場市史』下巻
- 西川博孝 1987「田戸下層式一千葉県内の新資料を加えた検討－」『古代83』早稲田大学考古学研究会
- 領塚正浩 1987「田戸下層式土器細分への覚書」『土曜考古12』土曜考古研究会
- 岡本東三ほか 1994『城ノ台南貝塚発掘調査報告書－千葉県香取郡小見川町－』千葉大学考古学研究室
- 財団法人千葉県文化財センター 1998『干潟工業団地埋蔵文化財調査報告書－干潟町諏訪山遺跡・十二段遺跡・茄子台遺跡・桜井平遺跡－』千葉県文化財センター調査報告第321集
- 財団法人千葉県文化財センター 2000『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XIII－東峰御幸烟西遺跡(空港No.51遺跡)－』千葉県文化財センター調査報告第385集
- 財団法人千葉県文化財センター 2002『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XVII－香山新田安戸台遺跡(空港No.9遺跡・取香和田戸遺跡(空港No.60遺跡)－』千葉県文化財センター調査報告第431集
- 小笠原永隆 2005「関東地方南部における縄文時代早期中葉の土器様相」『早期中葉の再検討』縄文セミナーの会
- 領塚正浩 2005「東北・北海道地方における早期中葉の土器編年」『早期中葉の再検討』縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会 2005『早期中葉の再検討－記録集－』
- 公益財団法人千葉県教育振興財団 2006『成田国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XXII－十余三稲荷峰遺跡(空港No.67遺跡)－』千葉県文化財センター調査報告第540集

写 真 図 版



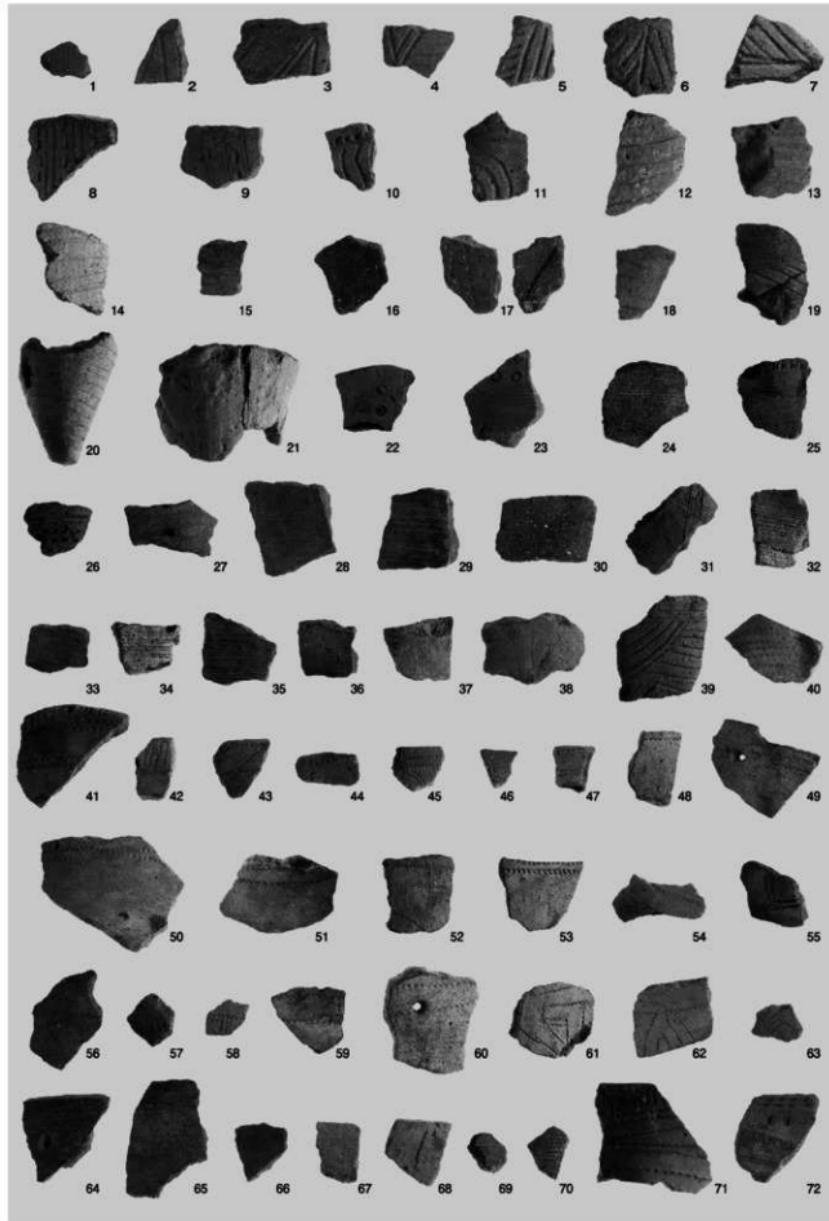
図版2



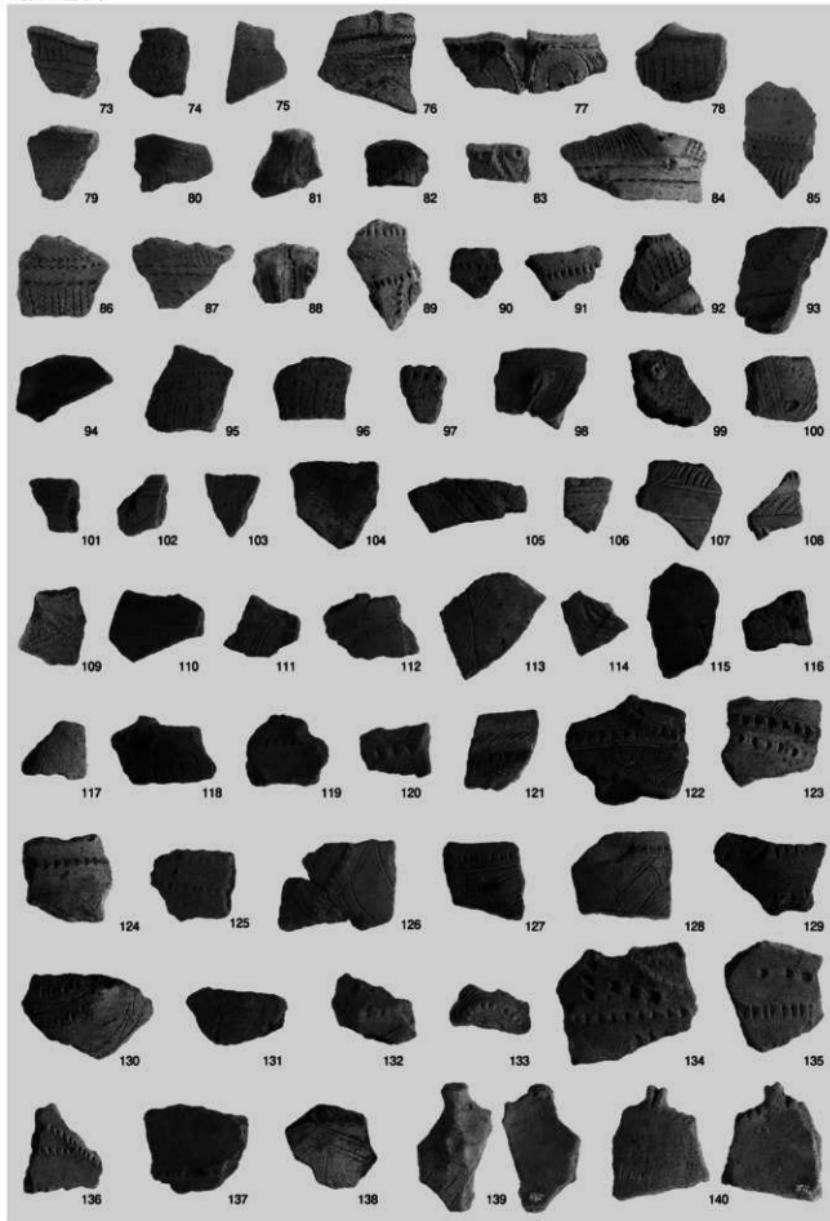


図版4

縄文土器(1)

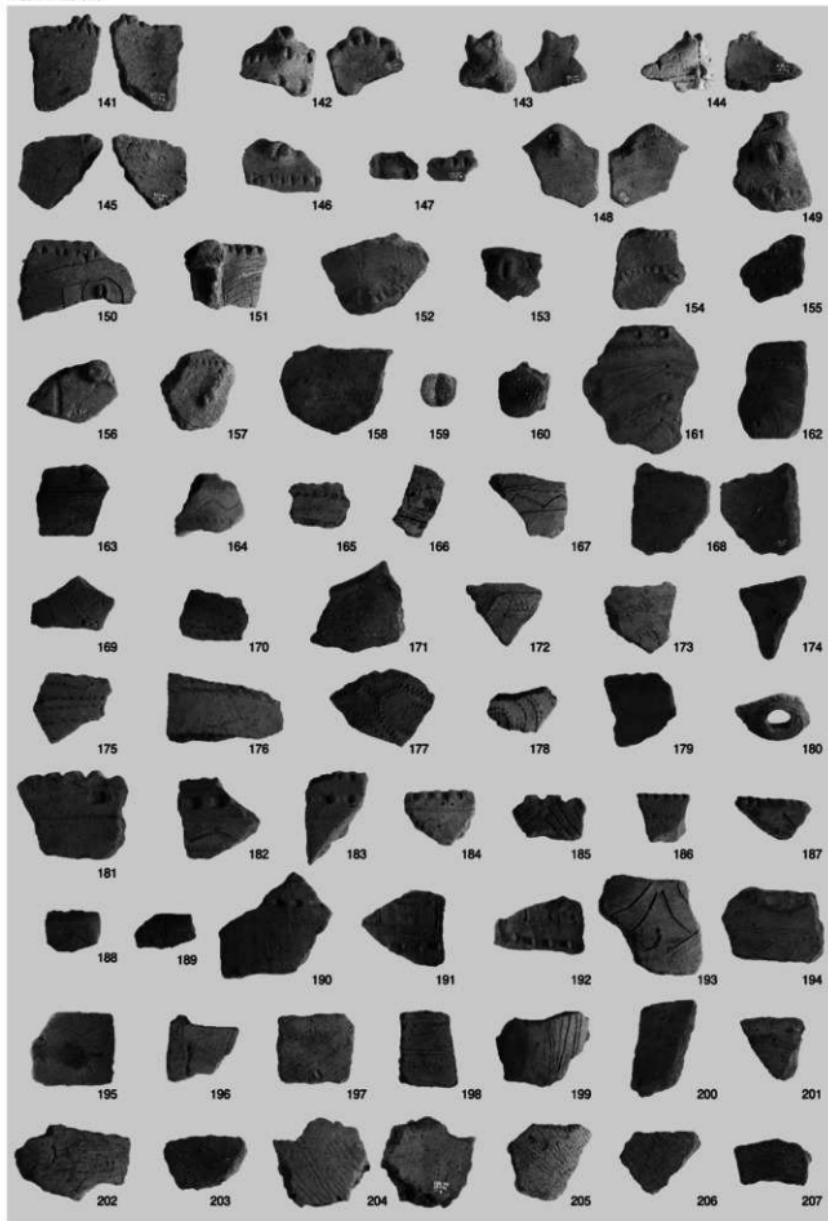


縄文土器(2)

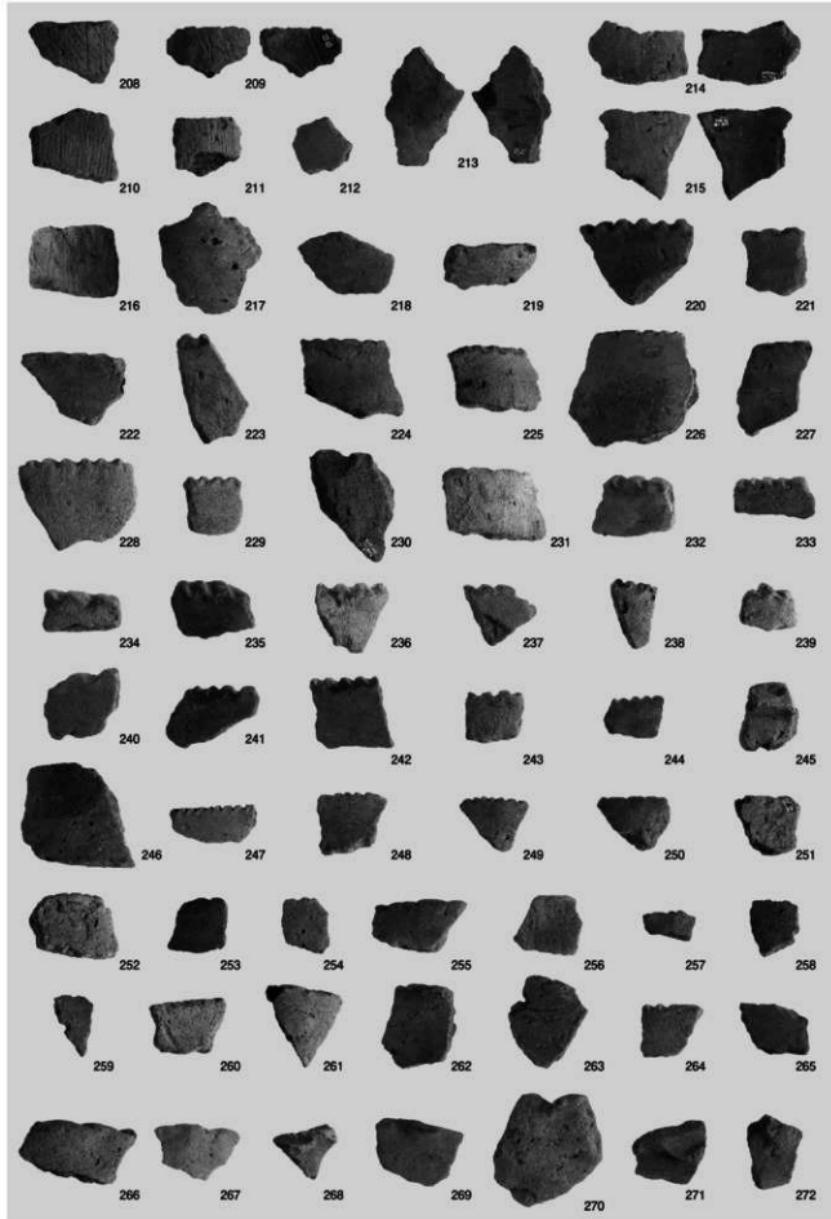


図版6

縄文土器(3)

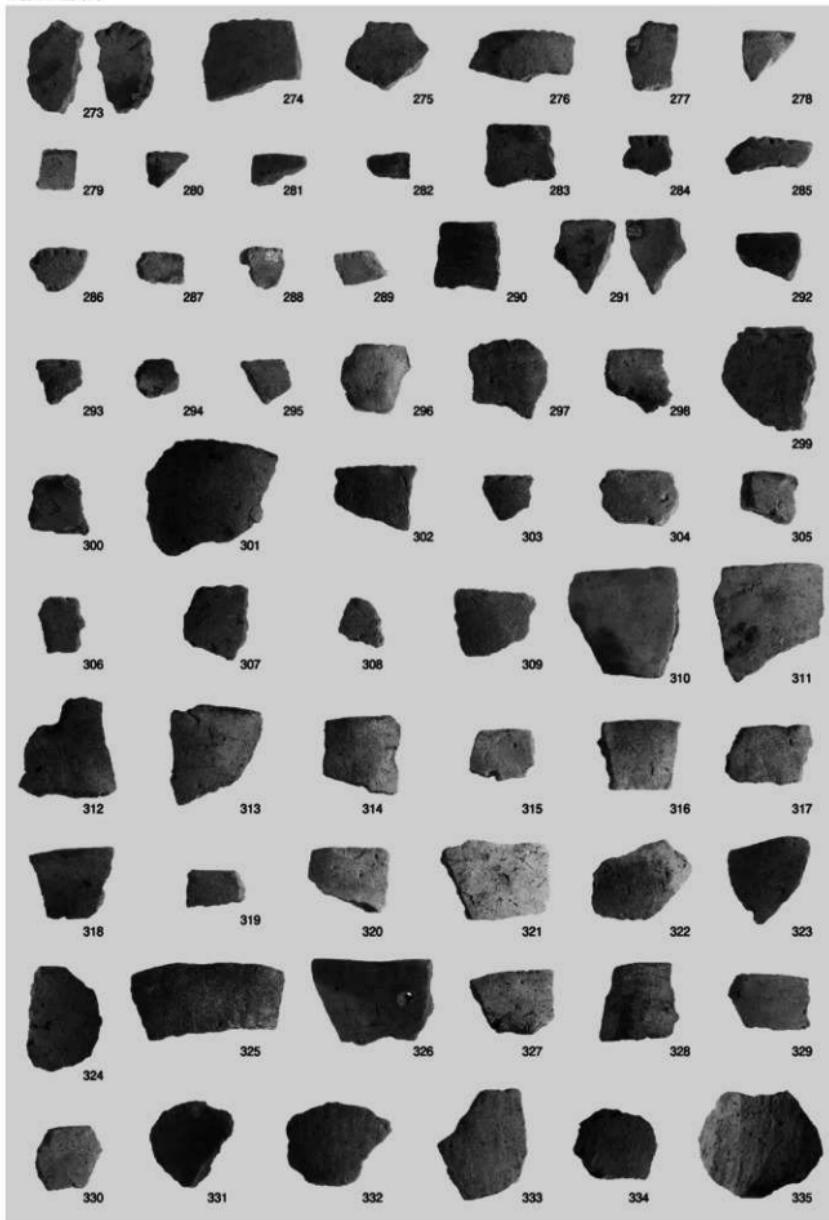


縄文土器(4)

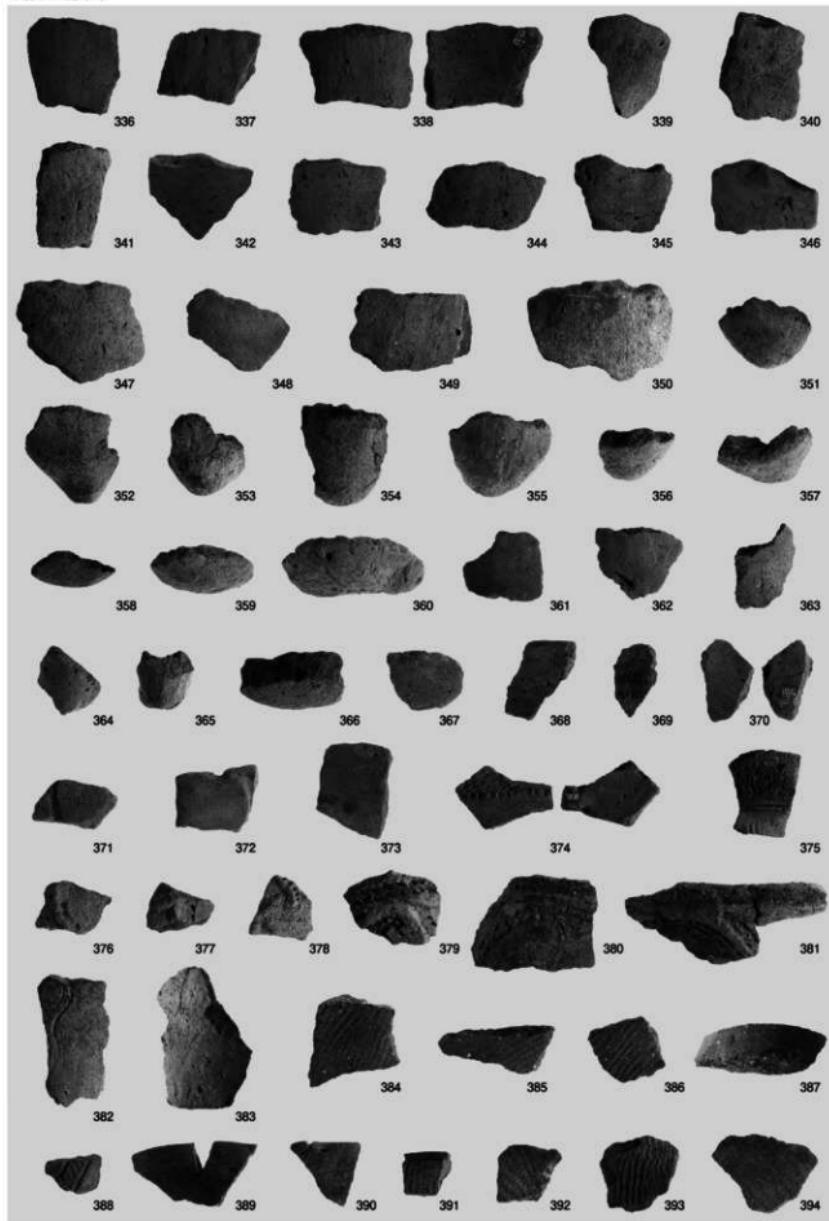


図版8

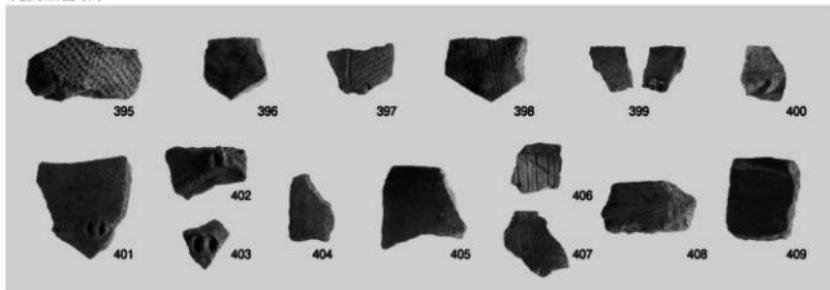
縄文土器(5)



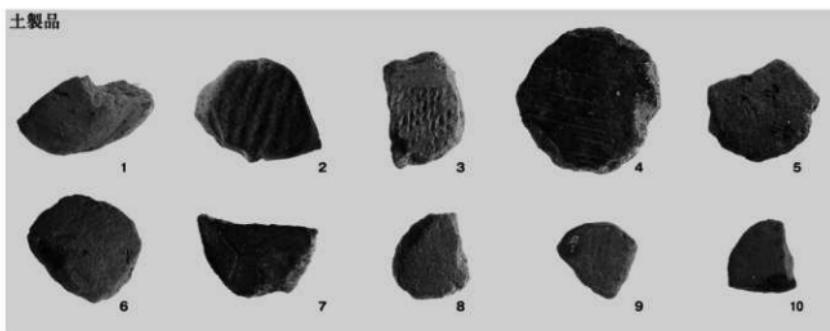
縄文土器(6)



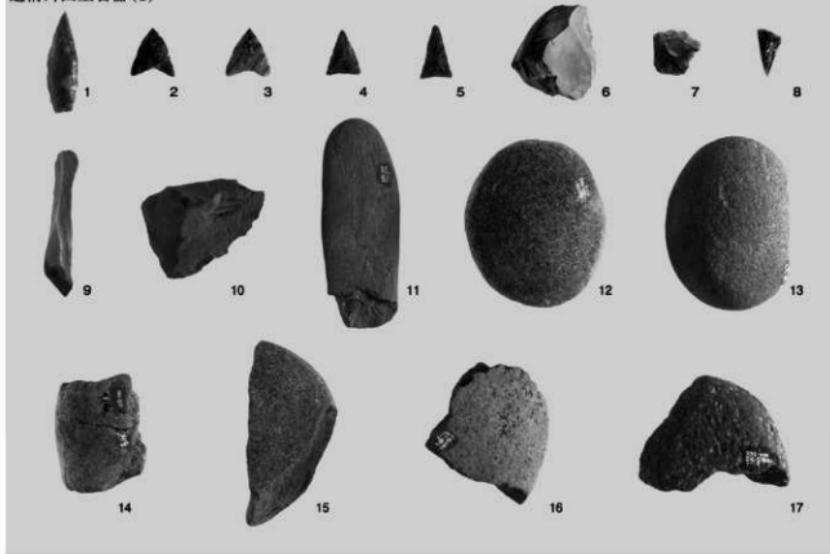
縄文土器(7)



土製品



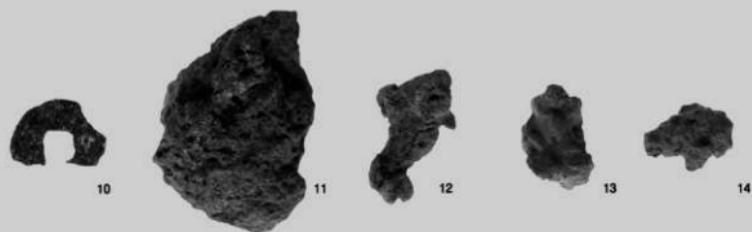
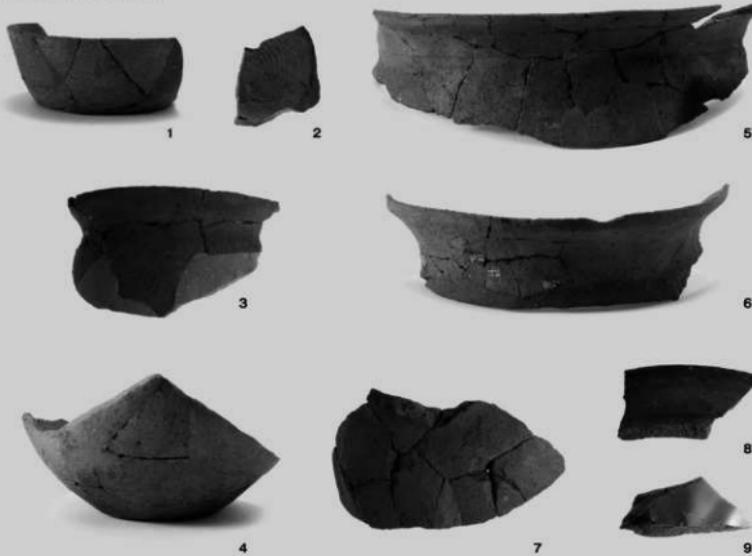
遺構外出土石器(1)



遺構外出土石器(2)



道路状遺構周辺出土遺物



報告書抄録

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第9集

匝瑳市小高遺跡
—特別支援学校整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成28年2月2日発行

編集・発行 千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町1-1
印 刷 三陽メディア株式会社
千葉市中央区浜野町1397
